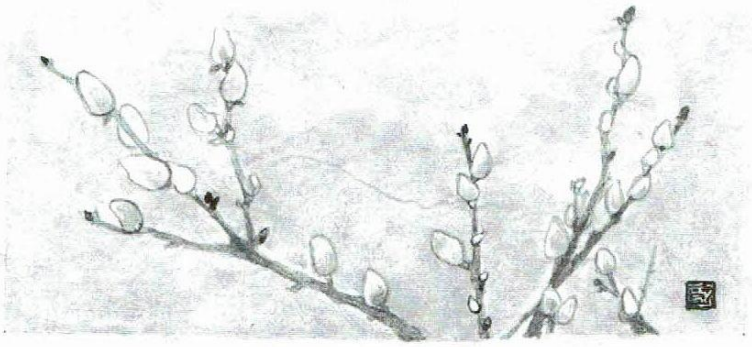
やまざき文化

2000－2＊No.19

山崎町文化協会



二〇〇〇年を迎えて

山崎町文化協会会長　壺阪　壽

いよいよ二〇〇〇年を迎えました。振り返りますと、一九〇〇年代というのは実に出来事の多い世紀でした。二度も人類がそれまで築き上げた文明を一挙に壊してしまうのではないかと思われる大戦を起こしてしまい、多くの尊い人命を失ってしまいました。

又、一方では此の世紀は大変な技術の進歩した時代でもあります。その進歩はまさに驚異的と考えられる程であります。

そしてそこにつらぬかれている考えの根底にあるものは、大量生産と生活の快適さであったのです。

いかにコストを安くして大量に物を造るか、それによって人々の生活がいかに豊かになるかといった時代の流れの中で、物は溢れてしまいました。

例えば自動車が出現した当時は大変高価なものであったのが、大量生産することによって価格が安くなり多くの人の手に入るようになりました。

又、最近では通信の技術も大変進んで、つい数年前まではそれほど普及していなかった携帯電話が、今では誰もが持っているといったようになってしまいました。技術の進歩は驚異的でとどまることを知らないと申せます。

然し乍らその反面で失ったものも多くあります。多くの物を生産しすぎて、たくさんの産業廃棄物を出してしまって、それをいかに処理するかが、大きな社会問題となっていますし、人間関係でも今までのような関係が崩れてしまい新しい地域社会に於ける人間関係を創らねばならなくなってきました。

このような時代には、やはり文化活動が、特に地域文化活動が必要になってまいります。その文化活動を通じて個人個人が、一人の人間としてきちんとした考えの基礎の上に立って行動する文化的活動こそ二〇〇〇年には展開したいものです。

◇目　次◇

二〇〇〇年を迎えて　壺阪　壽　2
ふたりの奉行　荒木　俊介　3
短　歌　稲村　幸子　12
俳　句　井口　泰子　14
「チンパオ」と「少年の目」　黒藪　次男　16
大分にて　竹田　浩三　18
山崎茶華道協会創立三十周年を迎えて　金近　小春　18
元禄繚乱の詩　小川　登　19
昭和会のこと　庄　忠正　19
コーラスと共に　小畑芙美子　20
勝負の心は花いちもんめ　杉元　正輝　20
今日このごろ　福岡　久蔵　21
二人の母へありがとうの思いを込めて　飛石　晃男　21
囲碁は生涯の友　森本　一二　22
童謡、唱歌　塚田　美紀　22
春安　中寺の略歴　志水　正信　23
山野草を追いかけて　増田　珠代　23
竹の音色に魅せられて　大部　正勝　24
踊りに出会えて　中野みつゑ　24
扇の裏表　坂東寿江予志　25
太鼓の魅力　松浦　昌代　25
地域振興の一つの考え　中村　勤　26
絹の道を訪ねて　中井てるお　26
浄瑠璃の風景　久保　寅夫　27
薪　能　葭谷　驍　27
事務局便り　藤村　清一　28
編集後記　荒木　俊介　28
表紙画／カット／　神名　彰子
表紙題字　尾崎　正一

ふたりの奉行

山崎文学会　荒木俊介

(一)

「アノ日ノ出来事ハ、ワタクシ生涯忘レルコト出来マセン。アノ三日間トユウモノハ長崎ノ町丸デ戦争ノ様ナ有様デシタ」

日本滞在十四年に及ぶ甲比丹（カピタン）（和蘭商館長）ドーフの日本語は流石に流暢であった。

ここは、長崎和蘭商館の応接間、窓ぎわのガーデンには春の花が咲き乱れ、その後方にはゆるやかな山並みを背景にした長崎の港が長閉（のどか）に広がっている。三月中旬といえば、さすが長崎は江戸と違って暖かであった。

円卓を挟んで甲比丹ドーフと相対して椅子に腰を下ろしているのは、この二月に着任して来たばかりの長崎奉行遠山左衛門尉景普（かげなら）である。

あの日の出来事とはイギリスのフリゲート艦フェートン号の長崎港不法侵入事件のことである。時の奉行松平図書頭康英は、その責を負って自決した。

遠山景普と松平康英とは同じ目付衆の頃から同僚として特に親しく付き合っていただけに景普は、予てからこの事件で康英を扶けて事に当ったドーフに会った時はドーフ自身の目を通して見たその全容を聞きたいと思っていたのだが、着任後の諸行事に追われ、今日やっとその機会が訪れたのである。

実は景普がドーフと会うのは、これが初めてではなかった。

六年前、文化元年九月ロシアの通商使節レザノフが、それを更に遡ること十一年前同じく通商を求めて松前に寄港したロシア使節ラックスマンに与えた長崎入港許可証を持って来航したことがある。長い鎖国で外交に不馴れな幕府は、対応に苦慮し、その翌年三月になって、やっと当時目付であった遠山景普にその交渉役を命じて長崎に下向させた。

レザノフが来航してからほぼ七ヵ月が経過していた。その間レザノフは、竹矢来に囲われた対岸の屋敷に、丸で囚人同様の生活を余儀なくさせられていたのである。交渉は難航が予想されていた。

しかし、景普は、外国事情に詳しいドーフの助けをかりて、事なくレザノフを退去させることに成功した。これを機に能吏目付景普と敏腕商人ドーフは、互によく、その人間を理解しあう仲となった。だからドーフは、その翌年長崎奉行を退任する成瀬因幡守に代って景普が来るのではと、ひそかに予想していた一人であった。ところが後任は松平図書頭康英であった。

「初メテ松平様ニオ会イシタ時、オ若イノト容姿ノ立派ナノニハ感動シマシタ」

「私などとは違って高家育ちでしたから礼儀正しさは城中でも評判でした」

「コウケ育チ？」

「つまり、幕府の儀式、祭典などを司る格式の高い家柄なのです」

「ナルホド養子トハ聞イテキマシタガ、ソコマデハ」

「武家に縁組されて、過去とは一切関わりなく武士らしく生きようとされていた様です」

「オー道理デサムライラシイ立派ナ最後デシタ」

ドーフは大きく手を広げて感動の様子を現わした。

「平素モ部下思イノ思慮深イ方デシタガ、アノ時モ英艦ノ蛮行ニ激怒サレテキマシタガ、私ノ助言モヨク聞カレ、冷静ニ判断シテ、砲火ヲ交エルコトナク長崎ノ町ヲ戦火カラ救イマシタ。ソシテソノ責ヲ一身ニ負ワレタノデス。ワタクシ、本当ノ日本ノサムライノ姿ヲ見ル思イデシタ」

「外見とは違って気骨のある方で、幕府も惜しい人を失ったと残念がっています」

「ソレニシテモ成瀬様ノ後任ニハワタクシ遠山様ガオミエニナラレルモノト思ッテキマシタ。デモ、ソウデナク……」

良かったといおうとして不謹慎だと気づいたのか、急に口を噤んで

「サア、ドウゾ遠慮ナク召シ上リ下サイ」

と繕う様に卓上に置かれたワインの瓶をとると景普の杯になみなみと注いだ。

ドーフならずとも柳営内にもレザノフ来航一件の後だけにそうした憶測が一部には取り沙汰されていた。

長崎奉行、それは数ある遠国奉行の中でも出色の要職である。当時我が国が海外に向けて開いていた唯一の港である。下向に当って将軍自らがその任務の重要性を説いて ―心ゆるびなく、おごそかに慎むべし― と激励したといわれる程で、下向、帰府の道中の格式は、十万石大名並として、その権威を誇示した。職務は、貿易の管理は

勿論だが、九州を中心とする西国大名の統括、キリスト教の取り締りといった重要な任務が課せられているが、その収入の多さも羨望の的であった。

役高は、時代によって違うが大体三千両前後、しかしそれにも増して多いのが貿易にからむ公的な副収入で、そのためその猟官費用は巷間二千両というあらぬ噂が流れる程であった。だからその任命に当って様々な憶測が流れるのも当然であった。

まして、レザノフ来航一件の後だけに幕府の内情に疎いドーフが若しや遠山様ではと思ったのも無理はなかった。いや疎いというより開放的な西欧人のドーフにとっては、遠く離れたサムライの国日本の幕府の内情などは不可解そのものであった。年一回の参府に際して江戸城大広間に於ける滑稽とも思える形式的なザリガニ式の将軍への謁見、そしてその両側に並ぶ幕閣達によって長年に渡って変革を繰返し組織された幕府の内情などは到底理解出来得る世界ではなかった。

(二)

江戸城中奥、その北西の最も奥まったところに将軍が日常座臥する御座所がある。そこから南に御成り廊下を行くと公式謁見などに使われる黒書院に突き当る。その手前左側にある部屋が老中達が詰める御用部屋である。

ここは柳営中幕政の最高決定機関であり、老中に列することを決裁の印を押すところから加判の列に加わるとも或は俗に幕閣とも称された。

この部屋に出入り出来るのは老中のみで、部屋の中央には大きな火鉢が据えられ、機密に関する重要なことは、壁に耳ありで火鉢に敷きつめられた椿灰の上に火箸で書いて密談した。

この様にして徳川幕府三百年の間に無心に走る一片の火箸の先の動きが一国の進むべき道から一人の個人の運命までを良きにしろ、悪しきにしろ幾度左右して来たことであろうか。

ここで決裁された案件は、廊下一つ南側に隔てた奥佑筆部屋で書面にしたためられて、側用人によって将軍の手もとに届けられ、側衆達によって読み上げられる。余程のことがない限り、奉書紙を十六に切った紙片に「伺いの通りたるべく候」と書かれて書類に差し挟んで老中の手もとに返って来る。

長年の慣習に従って極めてことは、儀礼的に運ばれて行く。

第八十二代長崎奉行に松平図書頭康英がこの様な手続のもとに選ばれた経緯についても、勿論その例外ではない。

この松平家というのは、所謂安祥譜代といわれ、家康が竹千代と名乗る頃からの家臣で名門中の名門である。

しかし実子ではない。病弱であった当主康彊(やすかた)が二十五才で夭折するに臨んで養子に迎えられたのである。その実家である前田家の祖は京都の公家押小路大納言公音(きみおと)の二男玄長(はるなが)で、将軍綱吉の時召されて高家に列せられて幕臣となり、前田家を名乗った。以来代々朝廷への使節や幕府の儀式を司って来た、これ又名門である。康英は、その三代目前田清長の二男で伊織を名乗ったが、松平家二千石の遺跡を継ぐに及んで康英と改名した。十七才の時である。武家の二、三男ともなるとその知行などに分け与えるだけの余裕がなければ、養子縁組するか、さもなければ最悪の時は生涯部屋住みの憂き目を見る場合さえある。又たとえ養子縁組は出来ても養父が長く健在の場合は、それだけ部屋住みは長くなり、出仕は遅れることになる。

その点康英の場合当主の死に臨んでの縁組であるから部屋住みの経験はなく全く幸運であった。その器量と相まって二十八才で中奥番士、三十三才で御徒頭で布衣を許され、四十才の時早くも目付衆に続いて御船手頭兼務を命ぜられている。将来を嘱望された少壮目付であったらしく、四十八才の時に長崎奉行に任ぜられている。長崎奉行といえば、五十代か六十代といわれているところからみても異例の抜擢の様である。

同じ養子でありながら遠山景普の場合、全く対照的といってよい程不運であった。というのは、養家遠山家は、知行五百石の所謂貧乏旗本である上に景普の長男景元が生れた翌年に養父景好に実子景善が生れたことである。皮肉な不運であった。そのため実父の情として景善にも家を継がせたいという望みが出るのは当然で、そこで話し合いの結果戸籍の上で景好を景普の子とし、景元を景好の子、いいかえれば実父景普は実子景元の祖父となるという武家社会ならではの奇妙な父子関係に甘んじなければならなかった。苦労人遠山景普の始まりである。

その結果、景元が二十一才の時旗本堀田伊勢守一知の妹を娶る頃は、一つ邸の中に四組の夫婦が同居するといった複雑な家族事情が生じることになる。丁度その頃景元は邸を出て浅草奥山の娼家に入り浸りの放蕩生活に入る。後年桜吹雪の彫物で名奉行の名を売った遠山左衛門尉景元のことである。一説には戸籍上の父景好の存在を引き立てるための演技ともいわれている。

この放蕩は、景普が長崎奉行になる頃もまだ続いていたが、景普自身も養父景好の死により将軍家斉に初目見えして出仕したのが三十五才の時で、それ迄は徒食の部屋

住みで稀にみる遅い仕官であった。しかし、それが却って忍耐強い性格の糧となったのも事実である。

大変な読書家であった。目付の頃城中に書物を持参して、暇をみては「我々の様な貧乏旗本は家にいては何かと煩わしいことが多いので」と寂然と読書に耽っていたという逸話が残っているが、それはただ単に趣味とか複雑な家を逃れるといったためだけでなく、貧乏旗本から脱したいという意欲からでもあった。

それは、出仕して八年目、小姓組の時幕府の行う寛政六年度の学問吟味に於いて甲科の首席に挙げられていることでもよく分る。既に四十二才の時である。この学問吟味の成績がよければそれだけ高い役職に就け、知行とは別に、より高い役料がつくのである。

その翌年認められて西城に於いて嫡子家慶付の小姓を命ぜられ、その頃既に西城目付であった松平康英と知り合うことになる。

康英が三十四才景普が四十四才の時である。それから三年後寛政十一年三月ロシア軍艦の出没に悩む蝦夷地の視察に松平信濃守の供をして出向いている。そのこともあって、ロシア使節レザノフの長崎来航に際して目付特使としてその交渉にドーフの助力を得て無事退去に成功したのである。しかし、その後もロシア軍艦の蝦夷地への襲来は相次ぎ、景普は若年寄り堀田正敏、大目付中川忠英に従い、文化二年八月より翌年八月まで約一年間蝦夷地の視察に出向いている。営中の席の温まることのない外交上の苦労であった。そのため、翌寛政四年三月の第八十二代長崎奉行の任命に当って隠れた憶測の流れたのも根拠のないことではなかった。しかし、要職への登龍門といわれた目付に景普より二年早い任命の康英に決定したのも順当な成り行きでもあった。

この任命を心から喜んだのは、外ならぬ景普その人であった。その頃も城中で暇をみては読書に耽ったが、そうした時

「遠山殿、精が出ますな」

と声をかけてくれる康英の目は、他の朋輩とは違っていた。その目には門閥を誇る様なところはなく心から景普の境遇に同情し、励ましてくれる温かさが溢れていた。城中の読書といえば、周囲への気兼ねがあっただけに景普にとって大きな支えになった。

景普は、康英が四年の任期を全うして再び帰府して柳営の要職につかれる日を待ち望んでいただけにその自決は残念でならなかった。

㈡

「ソノ日ワタクシ、気分悪ク、マダ寝室ニ臥シテヰマシタ」

ドーフは語り始めた。

事件が　起きたのは八月十五日正午過ぎである。

いつものことだが最初に長崎半島最南端にある野母崎遠見番所で和蘭国旗を掲げた船が発見されたという報らせが小瀬戸、梅香崎、永昌寺の各番所を経て奉行所に報告された。

フェートン号事件の始まりである。

和蘭国旗を掲げている以上和蘭船であることは誰も疑わなかった。普通和蘭船が入港する際には次のような手続きが行われる。

先ず船は湾口にある高鉾島の島影に碇を下し奉行所からの検使舟を待つ。普通二艘で、一舟には奉行所からの検使役二名と通詞二名、他方には商館側から委員二名が乗って近づき乗船し、予め和蘭側が奉行所に提出している旗と蘭船の旗とを出し合い、和蘭船であることを確かめ合う。これを「旗合せ」という。

その後、キリシタン禁制の幕法から船員の踏絵を行い、キリシタンに関する書籍など禁制品の検査をする。実際は禁制品などは入港前に箱に納めて釘付けにして船底に納めて検使らもこれを開けない慣習になっていた。最後に検使らは積荷目録を貰い船員中から主だった者一人を人質とし、積まれている武器類も入港中は一時長崎の武器庫に保管するため舟に乗せ、和蘭船は引き舟で入港することになる。

「ハジメ奉行所カラ和蘭船ガ入港スルカラ、イツモノ様ニ検使ノ委員二名ヲ出ス様知ラセガアッタ時、ハテナ、ト思イマシタガ、ソノ後スグ思イ直シテ書記ノホーセマント助手ノスヒンメルノ二人ヲ差シ向ケマシタ」

というのは、例年、蘭船は六月か七月に来るのが常で八月入港というのは今迄なかったからである。しかし、当時和蘭は、ナポレオンによってフランスに併合されていたためイギリスとは敵対関係にあって、イギリスは、それを機に南太平洋に於ける和蘭船の拿捕、略奪などを行ってあわよくば和蘭商館の貿易の権益を手中に納めようとしていたのである。ドーフは、船の入港が遅れたのは、イギリスの海軍の妨害によるものだと判断したのである。

ドーフは、バルコニーに出て、いつも商船が碇を下ろす高鉾島の方に望遠鏡を向けた。確かに和蘭国旗をかかげた船が島影に碇泊している。ドーフは、その年の入港は

諦めていただけによく無事に来てくれたものだと思うと同時に久しぶりに本国のワインやチーズを味うことが出来ると内心喜んだ。

その頃奉行所から差し向けられた検使役の菅谷安次郎、上川伝右衛門の二人と通詞二人に和蘭商館から差し向けられたホーセマンとスヒンメルの二人が二艘の舟に分乗して碇泊している商船に近づいていた。

愈々接近するにつれ、その船の異様さに気づいたホーセマンとスヒンメルは

「これはフリゲート艦ではないか」

と顔を見合わせた頃、その船から端艇が下ろされて、先を漕いでいたホーセマンらの乗った舟に近づいて来た。いつもはこの様なことはなく、和蘭船に接舷すると舷側に階段が設置されて、こちらから乗り込むのである。不審に思っている中、互に接近するにつれてその端艇の乗員が武装した水兵であることが分ったが、その時は既に手遅れであった。

勢いよく接舷して来た端艇には正しく武装した水兵らしき兵員が乗っていた。全く不意のことで動転したホーセマンらは言葉もなかった。

するとその中の主だったと思われる一人が

「我々ハ、イギリス海軍ダガ、コノ長崎港ニ和蘭商船ガ碇泊シテイルトイウ情報ヲ得テ捜シニ来タ。捜索ノ間、オ前達二人ヲ人質トシテ艦ニ連レテ行ク」

といって乗り移って来た。ホーセマンらも漸く事の次第が判明して来たが、このまま素直には応じられず、カタコトの英語で後の舟を指さしながら

「アノ検使舟ガ来ル迄待ッテクレ。我々ニハ何ンラ権限ガナイ」

と、必死に事態を引き延して打開をはかった。検使舟もその異常な事態を察して舟を近づけて

「いづこの国の船なりや」

と叫んでも海の上、しかも言葉が通ぜず、その中に埒があかないとみた英兵達は無理矢理にホーセマンら二人を端艇に拉致し始めた。

すると、検使舟に乗っていた猪股、植村の二人の通詞がこの事態を奉行所に報せようとしてか、ざぶんと海に飛び込んで近くの西泊番所に向って泳ぎ出した。

英水兵達は、そうした動きには目もくれずホーセマンら二人を端艇に移乗させると、その儘、後も見ずに自艇に向けて漕ぎ出していった。とても検使舟などの追つける速さではない。みるみる離されて艦上に引き上げられてしまった。気の毒なのはこの二人の検使役で素手ではどうすることも出来ず、しばらくは周囲を廻遊して折衝を求めたが見上げる様な大艦では全く応答なく引き帰さざるを得なかった。

この変事は先に西泊番所に泳ぎ帰った二人の通詞や海岸で望見していた人々によって奉行所に報らされ、所内は緊迫した空気に包まれていた。かなり遅れてそこに二人の検使役が帰って来たのだが、ホーセマンとスヒンメルの姿はなかった。

一刻も早くこの変事の実態を知りたかった奉行の松平康英は

「何処の国の船か」

などと尋ねてもこの二人の検使役の返事は要領を得なかった。康英は次第に苛立って来た。予期せぬ海の上の出来事でしかも言葉も通ぜず無理もなかったが、康英の我慢のならなかったのは、二人の検使役が目の前でみすみす拉致されるのを見ながら帰って来たことであった。

「直ちにその国籍不明の船に引き返し、掛け合って二人の蘭人を連れて帰れ」

と厳命した。康英自身も経験もない出来事への対策に戸惑っていた。その一方で和蘭商館に使者をやってこの異常な事態を知らせ、ホーセマンとスヒンメルの二人の救出策やその船の国籍などを問わしめた。

「私ハソノ知ラセヲ聞キ、驚イテ、書面を書イテ、ソノ船ハ恐ラク英国ノ軍艦デアルコト、又、二人ノ救出ニツイテハ私ガソノ英国ノ軍艦の艦長ニ二人ハ軍人デハナク和蘭商館ノ職員デアルカラ直チニ釈放サレタシトイッタ書面ヲ送リタイトイッタコトヲ奉行ノ松平様ニコトヅケマシタ」

ドーフは、その後直ちに事態に備えて、最も重要な日本と和蘭との通商許可証である朱印状や貴金属類をとりまとめて、何時でも運び出せる準備を始めた。

丁度その頃、既に十時頃になっていたが、俄に港内が騒がしくなって来た。武装した英水兵と思われる者の乗った端艇四、五隻が港内を我が物顔に漕ぎ廻っているという。中には上陸して、野菜や食料などを要求する者もあったという。噂は忽ち、沿岸村落は勿論長崎町内にも広まり、今にも英兵が上陸してくるのではといった恐怖から全域が騒然とした状態になって来た。

奉行所からは追いかけ和蘭商館にドーフ以下全員重要物件をとりまとめて奉行所に避難する様にとの使者が来た。

そこで商館員たちを先に奉行所に行かせ、ドーフは、最後に商館内を見廻って奉行所に行くと、早速、用人の一人から解読する様にと一枚の和蘭語で書かれた紙片を渡

された。既に夜の十一時頃なってにいた。それは明らかにスヒンメルの筆跡で
―船はペンガルより来り船長の名はペリューといい、然して彼は、飲水と食料を求む―
とあるだけで依然として、その常軌を逸した行動とその目的は分らなかった。ただ国籍と船種だけは遠見番所からの報告などでドーフの予測通り、国旗は既に英国旗に変えられ、多数の砲門をもった軍艦であることが分って来た。

ホーセマンとスヒンメルの二人の和蘭商館員が拉致されたという報告が入った頃は康英も予期せぬ事件に驚きと戸惑いの表情であったが、武装した水兵の乗った端艇三、四隻が日没から我が物顔で湾内を行動し始めたという報せが入ってから一変した。この英艦の不法な行動に対する激しい怒りと大事件に発展しかねないという危惧から来る緊張の表情がありありと現われていた。

案じ顔で奉行所に避難して来たドーフを見ると

「ドーフ殿、心配めさるな。ホーセマンとスヒンメルの二人は、必ず我々の手でお救い致す」

と申し訳けなげにいったが、握り締めた拳は怒りのためか激しく震えていた。

「私ハ、ソノ時ノ松平様ノ変リ方ヲミテ、コレハ却ッテ危険ダト思イマシタ。日本ノサムライ死ヲ恐レマセン。又長イ鎖国デ異国人ト駆ケ引キヲ知リマセン。コレデハ駄目デス。却ッテ危険デス」

果たしてその後、側用人の一人が先に奪還を命じた二人の検使役の消息が未だ分らぬので、これから奉行の命令で再び奪還に行くというのである。そこでドーフは、どの様にして奪還するのかと尋ねると

「彼の船は、狡計を以って蘭人を捕えたれば某も単独にて同船に赴き、最も丁重なる態度で船長に蘭人の釈放を乞い、若し拒否されたる時は、隠し持ったる刀にて先ず彼を刺し、次に我が腹を刺す覚悟でござる。我が日本人は本来、かかる暗殺は好まざるも、彼の船長が先に奸策を以って我が領土に於いて和蘭国旗の下に狼籍を振舞いたれば、敢えて暗殺もやむを得ず。某、一身を犠牲にして事に当る覚悟でござる」

というので驚いたドーフは、その様なことをすれば蘭人も殺され、得るところは何もないから止める様説得したが

「いや、如何なることがあろうとも決行致す」

ときかないので、ドーフは急遽康英に面会を求めて、その計画が如何に無謀であるかを説くとさすがに康英も納得してその計画は中止となった。

ドーフは、後年回想録の中で日本の武士は、駆引きということを知らず、死を厭わないことを潔しとするところがあると批判的なことを述べている。鎖国政策からくる一つの欠陥でもあろう。

その頃奉行所に重大な報告が入っていた。それは、たまたま長崎港警備の年番に当っていた佐賀藩（鍋島家）では千人の兵が駐屯すべきところを僅か五、六十人程の兵しかいないという。元来長崎港は佐賀、福岡、大村の三藩が年毎に交替で千人の兵を出して常時警備することになっていた。しかし、その頃の日本の諸藩は、大変な財政難に喘いでいた。九州の諸藩もその例外でなく、兵千人の一年間の駐屯費用は、藩の財政にとっては大きな負担であった。又、その頃は英佛戦争勃発以来英国東洋艦隊のバタビヤ沖などに於ける跳梁により蘭船の入港がと絶え勝ちとなり、その警備も必要性が薄れ、いつとなく兵員の削減が黙認されたかたちになっていた。

前任者からのこととはいえ、責任はまぬがれない。しかし、今は責任をうんぬんしている時ではなかった。

依然として港内を何の目的か分からないまま自由に漕ぎ廻る端艇に対して対抗手段をとらねばならぬのだが手勢も武器もなくその上夜間のため打つ手もなく、八方手づまりといった状態であった。

長崎の町中は、今にも武装した水兵達が上陸して来るのではないかという不安で騒然としているという。

康英の受けた衝撃は、大きかった。しかし士気にもかかわるとみて気丈夫に側近達を指揮して再三佐賀、福岡、大村、島原といった各藩に事態の急迫を報せて派兵を急がせると共にあるだけの兵員を集め、長崎砲術方の薬師寺久左衛門や砲術師範の高島四郎兵衛らの指揮のもとに各砲台を臨戦態勢に、又海岸の要所要所には夜間に入っても休むことなく乱杭や逆茂木を組むなど万一の場合にも備えて懸命に防衛態勢を整えさせた。

こうした動きを見ていたドーフは康英に三つの意見を具申した。

先ず第一に相手のフリゲート艦の全砲門が火を吹けば、長崎の町は忽ち火の海になってしまうから絶対にこちらから砲火を交えてはいけないということを進言すると

「尤もなことでござる。町民の安全が最も大切なれば、ご忠告は必ず守りましょう。」

と先程迄の内心の動揺を隠し切れないといった表情は既に消え、冷静に答える康英を見て、この奉行は、佐賀藩駐屯兵不在の件について先任者からのこととはいえ責任

をとらねばならぬと腹を決めておられると思ったと、これも回想録に書いている。
第二にフリゲート艦に食料と水を与えてはどうかということと、第三に人質の返還交渉に行かせてほしいと進言すると康英は
「国際法を守らぬ異国船には国法上食料、水などの物資は供給出来申さぬ。又、人質の返還に異国人の手を借りたとあっては、奉行所の面目が立ち申さぬ」
とどちらもゆるさなかった。
そうする中に派兵を要請した福岡、大村、島原といった藩から準備が整い次第直ちに派兵するという報せが届いたが不可解なのは、肝心の年番である佐賀藩からは、藩主斉直が江戸に在府中とか、長崎警備責任家老練早茂図が病気療養中とかで態度がはっきりしなかったことである。しかし例え派兵するといっても手勢の編成移動となるとそう簡単に出来るものではない。
相変わらず八方手づまりのまま十五日の夜を過さねばならなかった。

(四)

一方英艦に人質として収容されたホーセマンとスヒンメルは、先ず艦長室に連れて行かれた。しばらくすると艦長と呼ばれる一人の傲慢そうな若い士官が入って来ると、自分の名前も云わず
「この長崎港に蘭船はおらぬか」
と尋ねたので二人が
「今年になってから未だ一隻も入っておらぬ」
と答える。
「そんな筈はない。バタビヤ沖で会ったポルトガル船からの情報によると入港しているということだ。それではこれから港内を廻漕して検分してくる。若しいたら命はないものと思え」
といって、二人を番兵に警衛させて出ていった。
それから一刻程後再び帰って来ると
「確かに蘭船はいなかったがお前達は、まだ帰すわけにはいかぬ」
と寝室を与えられて一夜を過した。
その翌日再び二人を艦長室に呼び出し、相変らず傲慢な態度で我が艦は、これからの航海に備えて多量の水と食料が必要だからお前達で話し合って一人が人質として残り、一人が使者となって、今から自分が書く書簡を持って帰り、奉行所の責任者に渡し、要求通りの水と食料を持って帰れ。又、この要求の諾否に拘わらず、使者となった者は必らず一度帰ってくるよう。若し帰らない場合は人質は殺害するであろうと脅し、和蘭語を解するメッツレルという水夫に大略次の様な書面を書かせた。
「予は、飲水と食料を得るための予の小艇にて予の書簡を持った使者を送る故この書面に書いてある通りの物資を使者と共に本艦に届られたし、若しこの要求の通らざる時は、明朝早く日本及支那の船舶を焼き払うべし」
書簡というより脅迫状であった。話し合った結果、ホーセマンの方が、奉行と接する機会も多く日本語が少しは達者だからというのでホーセマンが使者となって帰ることになった。出発に際しホーセマンはスヒンメルに
「それでは私が行くことにしよう。しかし、どんな事があっても帰ってくる。決して貴君を見殺しにする様なことはしない」
と励しながら用意された小艇に乗り込んだ。しかし、その送り先は英兵達も恐ろしいのか、金貸し大明神と呼ばれる祠(ほこら)近くの岩礁の上にパンとロープを持たせて
「近くを行く舟を見つけて呼び寄せろ」
といって急いで帰って行った。ホーセマンは、幸いその後で西泊番所の警護舟に助けられ、日本語を解したので事情を話し、奉行所へ着くことが出来た。
ホーセマンの姿を見た康英とドーフは夢ではないかと喜んだが、艦長ペリュー署名の書面をドーフが日本語に訳して読み上げた時、康英の顔は、みるみる硬直して、その書状を手に立ち上るると、引き裂かんばかりの形相で余程無念であったらしいとドーフは回想している。人質を一人残している上に相手が五十門からの新鋭火砲を装備したフリゲート艦では、対等な戦いは無理であった。無念の思いは、側近達も同様であった。
砲術師範の薬師寺九左衛門は、英艦を偽計を以って港内に誘い入れ、その後方に数十艘の石舟を沈めて、袋の鼠にしてはとの建策もあったが、未だ各藩からの兵の来援のない状態では自信もなく、先ず残されている人質を取り返すことが先決であった。
「ドーフ殿、若し食料と水をホーセマンと共に届けた時、あの奸計を弄(ろう)するペリューとか申す者のこと、果して残りの人質を返すと思われるか」
と康英が尋ねた。
「コレハ、大変ムヅカシイ問イデシタガ、奸計ヲ用イタトハイエ、ペリューモ英国士官、ソノ言葉ハ信用スベキダト答エ、ソレ故要求サレタ飲水ト食料ヲ与エル様助言シ

マシタ。タダシ、ソノ作業ハ、成ルベク、ユックリト行エバ、スヒンメルモ解放サレ、又援兵モ到着シテクルデアロウカラ、ソレカラ対抗策ヲ建テラレルノガ良イノデハナイデショウカト助言シマシタ。松平様モ初メハ余リ乗リ気デナイ様デシタガ、私ガ繰リ返シ説得シタ結果、万一長崎ノ町ガ火ノ海ニナッテハトオ考エニナラレタノデショウ、私ノ策ヲ受ケ入レテ下サイマシタ」

こうしてペリューの要求通り野菜五十荷、梨千個、飲料水五千石、牛並びに豚数頭が数艘の舟に用意され、未の刻（午后二時頃）ホーセマンと共に英艦に送られた。

その頃になると

「大村藩の大村純昌が兵を率いて大村を発した」

「島原勢も海路島原を発した」

「すでに大村勢の先駆けは長崎に入った」

といった朗報が次々と入ったが、相変らず佐賀藩の動きは鈍く、旗本風情の奉行の指揮には従えぬといった態度すら感ぜられた。

その夜戌刻（午后九時）になって漸く水と食料などを運んで行ったホーセマンとスヒンメルの二人が解放されて帰って来た。それを見た当面の責任者である検使役の上川伝右衛門と菅谷安次郎の二人は勿論、康英、ドーフらも肩を抱き合って喜んだ。

しかし、その夜は、まだ援兵も来ておらず明早暁には、大村、島原、平戸、五島といった諸藩の手勢が到着するという報せが入ったので、明早朝各藩相寄って対抗策を協議するということになった。

明朝寅の下刻（午前六時前）頃到着したばかりの大村候や松平候（島原）を交えて対抗策を協議していたところ卯の下刻（午前七時）頃その席に

「フェートン号錨を上げ、出帆態勢に入る模様」

という一報が入って失望とも喜びともつかぬざわめきが起きた。

そしてその直後に今迄何んの音沙汰もなかった佐賀藩の軍学師米倉権兵衛が現われ

「吉報でござる。只今我が藩の兵一千が日見峠を越えてござる」

というと、すかさず大村候から

「さてさて佐賀藩の手際のよいこと、船が出てから兵が着くとは」

と皮肉られ、一座の失笑を買ったという一幕も語り継がれている。

この様にしてフェートン号は早暁錨を上げて出港して行った。

「フェートン号ガ去ッタ夜、慰労ノ酒宴ガ催サレ、ソノ席デ松平様ハ一人一人ニ労ヒノ言葉ヲカケラレテ廻ッテオラレマシタ。ソノ顔ニハ僅カ三日間ノ出来事デアリマシタガ、疲労ノアトガ、アリアリト現ワレテキマシタ。シカシ、ソノ表情ニハ静カニ澄ンダ湖ノ様ナ穏ヤカサガ浮ンデキテ、私ハソノ表情ヲ見テ、コノ方ハ既ニ死ヲ決ッシテオラレルトイウ予感ガシマシタ」

その予感通り酒宴を終え、奉行所に持ち込んでいた重要書類や荷物を職員らと共に取りまとめ商館に帰って半刻と過ぎぬうちに康英自決の報せを受けた。

酒宴を終えた後自室に入ると、幕府に対して先ず事件のあらましを書いた後、有効な処置がとれなかったことを恥じ、佐賀藩のとった行動を「不埒なり」と弾じ、これからの奉行は大名も指揮出来る大身の者を任ずる様上申し、最後に一身の恥辱はともかく、天下の恥辱を異国に晒したと認めた幕府への遺書をのこし、又実父には風の便りにこの事件を聞いて心配させては申し訳けないと書面を認め、用人上條徳右衛門を呼んで

「これをすまぬが信州の隠居三休殿（実父）に急ぎ届けてもらいたい。老心を騒がせては申し訳ないから」

と便りと称して手渡し、自室に入ると、家臣達の寝しずまるのを待って書院前の庭に小さな毛氈をしき、腹一文字に切って、返す刀で喉を切って自決した。少しの乱れもなく正しい作法に則った見事な最後であった。

それを知った長崎の町民は、長崎の町を戦火から救い、その責を一身に負って死を選んだと憐んだ。若し蛮勇を過信し、功名にはしって砲火を交えていたら長崎の町は火の海になっていたからである。

葬儀は、八月三十一日大音寺に於いて行われた。臨時奉行の大村上総介は康英の死は、ご法度の昧死（上奏文を書いて自殺すること）であるから派手な葬儀は差し控える様達したが、それでは長崎町民がおさまらず、長崎の町始って以来初めてといわれる程町役人は勿論町民の殆んどが参列するといった盛大なもので、後にその寺の境内に康平霊社と称する社を建て、その霊を慰めた。当日、宗教上寺内に入ることが許されなかった甲比丹ドーフらの門前に跪き涙にくれる姿が一際、人目を引いた。

その年の十一月十日幕府は、佐賀藩主鍋島斉直に対し

「長崎港内に英艦の端艇侵入致し、番所前を通過せしにも拘わらず、何等対処し得なかった」

として逼塞を申し渡し、鍋島斉直もその遺児に対して毎年二千両の金を贈ることを自ら申し出て弔意を表した。明けて文化六年二月二十一日斉直の罪が許されるのを待って、この事件に関する功罪賞罰が改めて申し渡された。最も重罪を課せられたのは佐賀藩で、重役深堀豊前、同鍋島主水、聞役英藤右衛門以下七人が切腹を命じられた。

「コノ報セガ長崎ノ町ニ伝ワッタ時忽チ瓦版ガ乱レ飛ビ、ソノ日一日、長崎ノ町ハオ祭騒ギデ町民ノ喜ビハ大変ナモノデシタ」

長いドーフの話は終った。

(五)

陽は少し傾いたとはいえ、窓外に広がる港のさざ波は喜々として春の陽光と戯れるかの様に輝いていた。僅か四年前にその様な事件が起きたとはとても思えぬ穏やかさである。

「サア、オ飲ミ下サイ」

ドーフは自分の話に興奮気味で喉が渇いたのか景普と自分の杯になみなみとワインを注ぐと一息に飲み干して疲れたのか椅子に深く寄り掛かった。

「長い話を有難く拝聴致し、長年の念願が叶い申した」

ドーフはドーフで親しい日本の友人に自分の目を通して見た事件の全容を話し終えたという満足感があった。しばらくしてドーフは、再び徐ろに話し始めた。

「ワタクシ長崎ニ来テカラ、モウ十四年ニナリマス。コノ頃フト、ドウシテコンナ遠イ国ニコンナニ長クヰルノカト母国ノ和蘭ガ恋シクナリカケマシタ。コレモ皆英佛戦争ノタメデス。松平様モ同ジデショウ。アノ戦争サエナケレバ、アノ様ナ事件ハ起ラナカッタノデスカラ、ソウ考エルト人間ニハ皆逆ラウ事ノ出来ナイ運命トユウモノガアル様デスネ」

「左様、そして幸と不幸は交互に訪れます」

といって、景普は塞翁ヶ馬の話をした。景普自身養父に実子が生れるという不運にあい、結果遅い出仕となったが、そのためこの事件の難を逃れられたのかも知れなかった。

「昔ノ中国ノ人ナカナカ面白イ話シマスネ。デモ運命ニツイテ、ワタシ達ノ国々ニモ面白イ話色々アリマスガ、ギリシャ神話ノ中ニアルオイディプス王子ノ悲劇ノ話ガ一番有名デス。面白イトユウヨリモ深刻デス。オイディプスニ比ベタラ不謹慎ナイイ方カモ知レマセンガ、松平様ハマダ幸セデス」

「まだ幸せ」

「マア、先ニ話シマショウ。マダ陽ハ高イカラゴユックリシテイッテ下サイ。」

景普がこの和蘭商館を訪れる目的の一つは、江戸では容易に見られない時計、地球儀、オルゴール、撞球台、望遠鏡といった物に接するだけでなく、星座や科学の話から論理的な物の考え方などを聞くことによって自分の見識を広めることであった。

「お聞かせ下され」

「ソレデハオ話シマショウ。昔ギリシャノテーベトユウ国ノ王ガ ―オ前ハ生レタ自分ノ子ニ殺サレル― トユウ神託ヲ運命ノ神アポロンカラ受ケルノデス」

驚いた王は、子が生れない様に気はつけていたが、つい酒のはずみで妃との間に王子が生れる。これがオイディプスである。困った王は、家来に命じ山奥に捨てさせるが、途中家来は、可哀想になり道端に置いて帰る。そこに偶、通りかかった羊飼いに拾われたオイディプスは、やがて子に恵まれぬコリントスの王家に貰われて王子として育つが、長ずるに及んで自分の身上について気になる噂が立つのでアポロンの神の神託を求めると ―お前は故郷に帰ってはいけない。父を殺し母を犯すであろう― と告げられる。

驚いたオイディプスは、王家には帰らずそのまま旅に出る。そして不思議な運命の糸に操られて、そうとは知らず本当の故郷テーベの国に入り、狭い道で馬車に乗った老人と出会い、譲れ、譲らぬと口論となり、その老人を殺してしまう。

その頃テーベの国では顔は人間の女、体はライオンで羽をつけたスヒンクスという怪物が現われ、出会う人間毎に謎をかけ、解けなければ食べてしまうので、人々は恐れ戦いていた。困ったテーベでは、その怪物を退治した者が最近亡くなった王の後を継ぐという触れを出していた。

テーベに入ったオイディプスは、程なくスヒンクスから謎をかけられる。

「朝は四本足、昼は二本足、夜は三本足、なにか」

「それは、人間だ。幼い時は這い、大きくなれば二本足で立つ。老いては杖をつく」

正解を出すとスヒンクスは恥じて谷に身を投じて死んでしまう。そこでオイディプスは触れ書きによりテーベの国の王位につき、その妃を妻とする。

しばらくすると、テーベの国では凶作や疫病がつづくので国ではデルポイに使者を送り、アポロンの神の託宣を乞うと―先王を殺した重罪人が今なおぬくぬくと生きているから捜して重罰にせよ―とあったので捜してみると、殺された老人の乗っていた

馬車の御者の証言からオイディプスその人だと分る。

「ソレヲ知ッタ妃ハ、悲嘆ノ余リ首ヲククッテ死ニマス。ソシテ、オイディプスハ―私ハ父ヲ殺シ、母ヲ犯シタ―

ト嘆イテ両眼ヲ抉ッテ贖罪ノ旅ニ出ルノデス。ツマリオイディプスハ、運命ノ悪戯カラ帰ルベキ故郷ヲ取リ違エタバカリニコノ様ナ悲劇ニアウノデス。ドウデス、神話トハイエ、コレ程深刻ナ話ハナイデショウ。ソレニ比ベタラ松平様ハ幸セダト思イマス。神様ニ祠ラレタノデスカラ」

話は、一見荒唐無稽な様でその中に目にも見えず音もなく過ぎて行く大きな運命の流れの前には人間の存在が木の葉の様な如何に小さなものであるかをよく物語っていた。

「如何にも興味深い話を聞かせて頂いた。ドーフ殿がいわれようとしていることはよく分かります」

「トコロデ、遠山様、何時カユオウト思ッテキタノデスガ。オ願イガ一ツゴザイマス」

「何んなりと仰って下さい。ドーフ殿のこと、骨を折りましょう」

ドーフの願いというのは、在日十四年そろそろ機会があれば、オランダに帰りたいのだが、日本人妻瓜生野との間に出来た一人息子丈吉は国法により連れ帰ることが出来ない。そこで大きくなった時、これも禁じられているが、地役人にとり立ててやってほしいということであった。

その後、景普は、幕府と度重なる折衝の結果、長年のドーフの願いを叶えてやり、これを置土産に四年の任期を無事終えて江戸に帰った。

ドーフもそれから三年後、安んじて一子丈吉を残し、オランダに帰ることが出来た。

江戸に帰った景普は、休む間もなく作事奉行に任命された。しかし、悩みの種は依然として続いていた。遠国にある時は忘れることもあったが江戸に帰ると切実であった。それは、今なお続く長男景元の放蕩であった。遠国にある時は、その後見を親友太田南畝（蜀山人）に頼んでいた。太田とは、学問吟味以来の親友である。というのは、その年のお目見得以上の甲科首席が景普で、お目見得以下の甲科首席が太田南畝であったという誼で、以来親交を続けて来た間であった。景元も太田南畝のいうことだけはよく聞いたが放蕩だけは、おさまらなかった。

当時の景普のことを肥前平戸藩主松浦静山がその著『甲子夜話』の中で大学頭林述斎の言として「不遇なると覚ゆ」と書いているのもこの頃のことと思われる。

景普は、作事奉行二年余の後、文政二年九月念願の勘定奉行に就任した。貧乏旗本としては最高の要職である。その年養父景好の実子景善を出仕させたが、その五年後西丸書院番士の時流行病で亡くなった。不幸な出来事とはいえ景普にとっては人生の重荷を下した様な出来事であった。

それによって翌年文政八年三月実子景元はその遺跡をつぎ、初お目見得、小納戸役を命ぜられた。三十二才の時である。以来放蕩は治まり、その四年後文政十二年二月景普は、四年の任期を終え勘定奉行を退任、同時に景普、景元父子揃って登城し、老中列座の中で家督を景元に譲り、寄合衆入りを許され隠居の身となった。七十七才にして初めてこの様なことが訪れようとは思いもしなかった身の安堵を実感した。

その後、楽士と号して作詞や好きな白楽天の詩の書写を楽しむ傍ら、日頃疎遠であった朋友、知人の居宅を訪れたりしながら、悠々自適の余生を送り八十七才の天寿を全うした。

フェートン号事件以来、既に二十九年の歳月が流れていた。勿論当時の幕閣達は総てこの世を去り、揃って鬼籍に名をつらねている。

若し、その幕閣達が生きていたとすれば、あの御用部屋の椿灰が敷きつめられた大火鉢の前でどの様な感慨に耽けることであろうか。

第二十一回春の芸能祭ご案内

日　時　平成十二年五月二十一日（日）
　　午前十時から午後三時まで
場　所　サンホールやまさき（山崎文化会館）
主　催　山崎町文化協会・山崎文化会館
後　援　神戸新聞社・山崎町教育委員会

会員の日頃の練習の成果を、ぜひご覧くださいますよう、ご案内申しあげます。

参加部門
山崎詩舞道連盟　山崎謡曲同好会
山崎郷土芸能保存会　山崎邦楽邦舞研究会
さつき民踊グループ　播州山崎太鼓
バンブー・ファイブ　山崎町老人大学

短歌

『障害を越えて』〈白杖のうた〉

山崎歌人協会　稲村幸子

視力なき児がいくたびも読み撫でしお伽話の貼り絵ぼろぼろ　森谷　康弘

右は、平成九年度の「上田三四二賞」第二席を受賞された歌である。

「上田三四二賞」というのは、昭和年間に医師として、また歌人、作家、文芸評論家として巾広く精力的に活躍され、昭和の終焉と共に病没された上田三四二氏の功績をたたえ、その一周忌を期して制定された文学の顕彰塔ともいうべきものであり、平成三年より毎年、氏の故郷小野市において全国規模の短歌大会が催され、優秀歌が選ばれ、特に上位五首が特賞として表彰されるものである。出詠歌数は毎年二千首を越え、全国各地はもちろん外国からの応募も見られる。

此の歌の内容は、視覚障害により目に光を失った子供たちのために作られたお伽話の本の貼り絵が、幾度も撫で読みされてボロボロになっている状態に焦点を当てて詠まれたものであり、読者はこの歌から、小さな手の指先に全神経を集めて貼り絵の童話を読んでいる幼児の姿を想い浮かべ、その表情をまでも感じ取ることができるのである。然もこの作者もまた、ボロボロの貼り絵を手で探っている失明の人であることを知るとき、その読後感はより深く切実なものとなる。

森谷さんは四十歳代で両眼を失明し、教職を退き、以来二十年の歳月を経て、点字も習熟されているが、点字ではことばのニュアンスに微妙な違いが生じるので、応募の詠草は代筆による。選者にその理由が伝わっていたかどうかはわからないが、何れにしても上位入賞にふさわしい歌として推賞決定されたものである。

此の年度の応募歌数は約二七〇〇首であったが、その中から日本歌壇の重鎮的存在である歌人方によって高く評価され、難関である「上田三四二賞」受賞の栄を獲得された事は当地歌人協会としても誇りとし特筆すべきことであろう。しかもこの作者の歌歴はさほど長くはない。

・小燕の巣立ちの後の軒下に田植終りしゴム靴を干す　森谷　康弘

作歌を始めて間もない平成三年の夏、郡民短歌祭に初入選された歌であるから歌歴は約十年ということになろう。

天性の文学的資質に拍車をかけて作歌に意欲を燃やし、次々と各地の大会に応募入選された多くの歌の中から幾首かを拾って記す。

・母の声背に聞きつつ盲ひ吾が足に探りて稲肥をまく

・峡の道樽木を積みて盲ひわれ母が先引く梶手を握る

長男としての責任感がみずからの身を励ましてなされるきびしい農作業である。

・初釜に出でゆく妻が仕事着のわれに点てたる朝の一服

・あたたかき言葉を背に受けとめて白杖かろくアーケード行く

めいりがちな心のあたたまるひとときの歌であり、読者の心をも和ませる。

・ふと吾の動かぬ瞳に気づきしか行商の男声なく去りぬ

・エレベーターの階のボタンを皆押せり両眼見ゆる者の顔して

彼は長身であり、引き締まった風貌の両眼は開いているので、白杖を使用しない時は一見して健常者と変りはない。

いつの頃からか作者は「盲ひわれ」の語を使われなくなった。自己の障害を、作歌の奥の手としない心構えが潔い。

作歌においては特に添削が必要である。読み返し書き直しノートをまっ黒にすることもある。然し、彼の机にはノートはない。ノートはその明晰な頭脳の中にあるのである。

歴史の旧い山崎歌壇には障害をもつ歌人も居られた。

・耳しひをあに歎かめや吾子と来て仰ぐやまとの塔の水煙　杉山　義昭

作者は極度の難聴であり、宗教と短歌を心の癒やしとなされていたように思われる。この歌は今歌碑となって、最上山の「文化のこみち」にひっそりと建っている。

失明歌人は今は森谷さん一人である。

・拡張の竣りし県道白杖をつきゆくわれの道は肩巾

・腕時計の音声表示たしかめて独り旅行の一歩踏みだす

心眼と感性豊かな詩脳から紡ぎ出されるこれらの歌は、われ等健常者のよき刺激剤となり、前向き人生への指針ともなる。新世紀二千年へ向かって、この白杖の歩みがますます確かなものとなるよう祈念したい。

木犀のかをりが君をいざなひて白杖かろく訪ね来たまふ　幸子

各地短歌祭入賞入選作品

（平成十一年度）

◇第十一回神戸短歌祭

（四月二十九日・神戸市立婦人会館）

・入選

集材機のレバーを握りて待つ妻に男は合図の手拭をふる　森谷　康弘

◇第十八回宍粟郡民短歌祭

（八月二十九日・波賀町民センターホール）

・兵庫県知事賞

呆けたる夫が主治医の問診にとまどいの眼をわれに向けきぬ　進藤てる子

・兵庫県議会長賞

「山がきれい空がきれい」と家妻の山椒をつむ病の癒えて　嶋田　純孝

・神戸新聞社賞

「父さんの為の教室」というに来て俎上の秋刀魚の目にたじろげり　南　裕之

・波賀町教育委員会賞

無農薬有機栽培の大豆とふ豆腐うたがはず掌に切る　冨和かず子

・宍粟郡歌人連盟賞

五月晴れ新茶のかをる知覧町特攻の兄ここより征きし　岩井アサ子

この夜更け話し相手の欲しと言ふ電話の向うの闇を思へり　森本萬千子

長身を弓なりにしてボール投ぐうなじ初々し高校球児　山根　円子

一節の伸びて皮はぐ今年竹少年に似て青鮮らしき　安東はつ子

もぐら威しにかたち変へたるペットボトルきりきり廻り光を零す　小林　郁子

◇兵庫ふれあいの祭典短歌祭

（十一月七日・兵庫県民会館）

・兵庫県知事賞

幼な児のひたすらに書くお絵かき帳どのページにも太陽がある　森本萬千子

・佳作

友よりのテープの便りに運ばれて春の潮騒病室に鳴る　森谷　康弘

◇西播磨短歌祭

（十一月十一日・西播磨文化会館）

・西播磨県民局長賞

ゆっくりと歩けば秋がよく見ゆと足病む妻のうしろからの声　嶋田　純孝

・西播文化会館長賞

山の湯にわれらを迎ふる剥製の鹿が脾腹に弾の跡残す　安政　嘉子

・県芸術文化協会賞

足萎えの夫が散歩にすがりたるわが二の腕に残る爪痕　進藤てる子

・佳作

羽化したるつくつく法師の鳴く幹にもぬけの殻の眼が光る　冨和かず子

女ゆゑ捨て身の恐さ持ちをりと後の席の声透り来る　森本萬千子

田を歩む白鷺の辺にほのかなる明り残して梅雨の日暮るる　菅谷美津子

かしわの短歌会　霜月歌会

兼題「音」「声」

久しぶりに題詠を試みた。短歌には、俳句の季語のような制約はない。然し、兼題によって作歌する方法は昔も今も行われ、作歌技術の研修にも用いられる。

○鉛筆の芯のぽきりと折れし音冴えいて冬は忽然と来る　菅谷美津子

（鋭敏な感覚が捉えた「音」である。鉛筆の折れるかすかな音に冴えを感じ、続いて近づく冬の足音を聴いた作者の感性が冴えていて、張りつめた声韻が深い詩情を湛えて美しい。）

○音水（おんずい）の谷間は深く声あらず村落（むら）に一人の媼見しのみ　南　裕之

（郡北の秋を尋ねて作者は車を徐行させている。行くほどに山は高く渓は深く、鳥の声さえもない寂かさ。動くものとては假村に見た老婆一人であった。核心を捉え、「声なき声」を簡潔に詠み上げて印象的である。）

○朝霧の晴るるを待ちて刈りとりし稲穂に小鳥の羽音騒がし　小松原　弘

（朝霧の晴れるのを待ってようやく刈り取り終った稲穂、それを待っていたかのように小鳥たちが羽音騒がしく啄んでいる。内容からは心穏やかならぬ筈であるのにこの歌からは、場景を歌に詠むという心のゆとりが感じられて、大らかで豊かな田園風物詩として読むことができた。

○雨漏りの音を聞きつつこの家と共に古りしを思う夜の更け　山本　正子

（ポッ　ポッ　間を置いて落ちる雨漏りの音ほどわびしいものはない。昼間はともかく、世間の静かな夜更けともなれば言いがたい哀愁に気がふさぐものである。末尾の「夜の更け」は言いたいところではあるが、家と共に古びたのは我が身であると思うならば「共に古りたるよわいを思う」とすべきところであろうか。）

その他、鹿の鳴く声、幻聴の母の声、温泉の湯の音、時計の秒針の音、ガードマンの声、ブランコに揺れる幼児の声など、それぞれに課題ととりくむ意欲の感じられる力作揃いであったが紙面の都合で代表作のみとする。

俳句

津山吟行

山崎俳句協会　青嶺句会

井口泰子

平成十一年五月九日、午前八時、青嶺句会一行十二名は、晴天に恵まれたことを感謝しつつ、津山方面への吟行に出発した。

中国道を西へ向かうと、窓外は青葉、若葉がきらきらと輝き、いろいろな花がつぎつぎに見えて目が離せない。

谷底に残る藁屋や桐の花　とみ代
山藤の垂れてここらの山低く　泊水

車中約一時間の後、院庄インターから下りて最初に訪れたのは、美作八十八ヶ所中、第五十六番札所の極楽山清眼寺。境内の牡丹園は丁度花のまっ盛りで、ほかに更紗どうだんやおだまきも咲いている美しいお寺であった。

何もかも忘れ牡丹に酔ひにけり　千里
牡丹寺仏に供す甘茶杓　光栄
牡丹の花粉を運ぶ虫のあり　薫風
ぼたん寺ぼたんに言葉かけ巡る　八重

バスへ戻る道では、花を摘んだり、草笛を吹いたり、みんな子供に還って楽しく歩いた。

草笛も吹きて童心よみがへり　君子

次に、鶴山公園を訪ねた。森家十八万六千五百石の城跡というだけあって、その規模の大きさに圧倒された。天守のあったところと言われる藤棚の下で、眼下の津山市を眺めながら、しばらく句作する。

いにしへを偲ぶ石垣風薫る　美保子
石垣の語る歳月花は葉に　千代
葉桜や七重にめぐる石の垣　泰子
高きより頬に優しき青葉風　ゆき

句会場は衆楽園の池の畔の余芳閣に予約されていた。広い庭園を巡ったり、池の鯉に餌をやったりしたあと、おいしいお弁当をいただく。

そして、句会が始まった。「これさえ無かったら……。」などと冗談を言いながらも、投句、披講と進んでいくうちに、いつもの真剣な句会となった。

薫風を入れて一会の夏座敷　光子

なお、衆楽園には、絲桜水にも地にも枝を垂れ　誓子の句碑が、満開のつつじに囲まれて建っており、桜の頃の庭園も偲ばれて、感銘深く鑑賞した。

さわらび句会詠草

冬薔薇つぼみは固く眠るごと　川崎栄子
生死(しょうじ)みな呑みしガンジス春寒し　庄昌子
トルソーの面輪描くや瑠璃揚羽　薄木満寿恵
待ちわびし風蘭今宵ひらき初む　山中正子
訪へば先ず風鈴の音に迎へられ　小林紫生
甚平鮫の風船も萎え夏去りぬ　藤井七代
名を呼ばれ素直に返事夜の秋　壷阪加代子
高野槇刈られて丸し秋麗　山岸その子
朝の日に秋燕胸を燦めかせ　本條淑子

青嶺句会詠草

平成や自販機で買ふかぶと虫　芦田　八重

喪にありて短き文の初便り　秋久　光子

流灯の美しければ猶哀し　石野　光栄

かたくりの花のしぐさや弥勒仏　井口　泰子

林道の余花を残して曲りけり　植木　遥子

初春の陽のやはらかき山河かな　岸野　昭三

月見草夢二の少女立たせたし　小畑　ぬい

玻璃越しに仲間見送る春の風邪　高野　薫風

還らざる人を偲びて盆の月　下村　君子

せせらぎの瀬音親しや猫柳　杉山美保子

寝たきりの母に持たせる初鏡　田中　良子

靴跡の窪み小さく下萌ゆる　鳥羽チエノ

さびれゆく町に由緒の余花の宮　永井とみ代

古りたれどもう一と夏を好きな服　秦　千里

控へ目に生きたき願ひ額の花　藤家　千代

振袖の歩幅となりて初詣　山口　栄子

玉砂利の炎鎮める水を打つ　山田　東軒

沈丁花句作を愛でし夫は亡く　和田千代子

額の花雨後の裏庭明るうす　三浦　ゆき

ほてりまだ覚めぬ磧の月見草　福田　泊水

山脈句会詠草

古文書の一語思案の蠅を打つ　浅田　耕三

照りつける揖保の川瀬や釣りの人　池田　允

旅一日一句に残る秋の暮　伊藤　勉

山風にもんどり打てり鯉幟　岩前多輝子

木洩日の斑の流れゐる清水掬む　宇野　幸子

ワイキキの海一望やビール酌む　岡田　富美

すれちがふ舞妓美し青簾　小倉　恒子

黄菖蒲水明りのせ水車まふ　尾崎イツエ

裏町の路地に向きあふ簾かな　垣口　正信

花のもと鐘が鳴ります日に三度　高野　薫

いさかひて寂しさますや秋の暮　竹内　益江

白銀の穂芒風のささやけり　田中美恵子

風薫る肩を豊かに辻地蔵　田中八重子

薄く濃く彩染め分けて山紅葉　牲川　信子

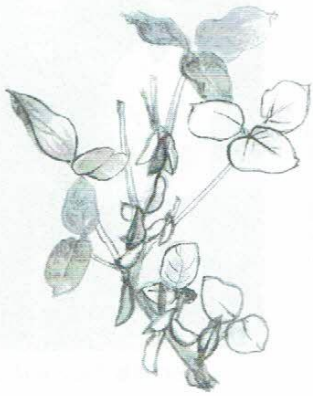
片陰で幾世重ねし六地蔵　畑林　和枝

淡路島浮かべて広し夏の海　原田　久代

蜻蛉の渓にきらめき遊びをり　福田　一栄

せせらぎに楽の調べか若葉風　前野　房子

老いざまや万朶の露にささやかれ　横江　敏夫



日中合作映画の誕生
―『チンパオ』と『少年の目』―

黒薮次男（山崎町庄能在住）

拙作『少年の目』（新日本出版）を原作にした映画『チンパオ』が完成して、過日、山崎町でも上映されました。『少年の目』は私の戦争体験をもとにした児童文学です。物語は、五十数年前に中国の戦場でたたかった相沢健が当時を回想し、孫に語りかけるというかたちで展開します。

相沢健は戦争で苦い体験をもっています。いまもその重荷を背負って生きています。相沢健の所属する部隊は航空通信隊でした。したがって直接戦闘に参加することはありませんでした。しかし、食糧に窮していました。ですから、農村を襲い「徴発」という略奪をやりました。

ある農村を襲い、チンパオ（中国の少年）が手塩にかけて育てた子牛を奪います。少年は子牛を取り戻すために、日本軍の宿舎に住み込んで、知恵と力をはたらかせます。

こんな少年と子牛のふれあいのなかで、日本兵士と少年の間に交流がめばえてきます。兵士たちは、しばし、ここが戦場であることを忘れて、少年と子牛をあたたかい目で見るようになります。しかし、戦争と日本軍隊のメカニズムは、こんな人間としての兵士をゆるしはしませんでした。ひとりの上官の命令によって、兵士の人間性は打ちくだかれ、子牛は少年の手から奪いとられてしまいます。このとき、相沢健は何もなし得なかった負い目を背負って今も生きているのです。

チンパオ・チンホイと桂林にて

戦争、軍隊は、人間の良心など一瞬に踏みにじり、人間を非人間的なけだものにしてしまうのです。ここに戦争の恐ろしさがあります。

こういう原作をベースに映画化が進みました。

この映画は日中合作です。資金も平等に出し合い、中国でも上映されます。ですから、中国側にも主張することがたくさんあります。中国側が問題にしたことは、日本兵の描き方です。中国側は『少年の目』に書かれているような人間的な日本兵はいない、日本兵はみな鬼だ、特に将校や下士官は鬼の中の鬼だ、というわけです。

日本側も、はいそうですか、とかんたんには受け入れられません。中田監督は、「人間の葛藤を書こうとすれば、いい面と悪い面が相克する、だから両面あるのが人間的なんだと主張したんですが、日本兵は鬼なんだから人間的なのはダメだと言われましてね……」というようなことをある対談で話しています。

これは一例にすぎません。シナリオの完成まで、何回も論議をかさねました。何べんも意見が衝突して、時にはシナリオをたたきつけるといったような場面もあったようです。ただ日中共通の思いは、「ふたたび戦場をつくらせない」ということだった、これが、この映画を完成させた、というようなことを私は中田監督から聞きました。

戦争で害を加えた側と害を被った側が、同じテーマで一つの映画をつくるというのですから、きびしいやりとりがあり、様々な障害があったと思います。その一つひとつを克服して『チンパオ』は完成したのです。『チンパオ』は、反戦、平和をテーマにしたものですが、いままでにつくられた反戦、平和の映画とは視点を変えた映画です。いままでの反戦、平和の映画は、被害者の側から描いています。「原爆」「特攻隊」「学童疎開」などがそれです。もちろんこれらの映画も貴重なものです。歴史の事実として忘れてはならないものです。同時に私たちは加害者であったことも忘れてはなりません。『チンパオ』は加害者の側から描いたはじめての映画です。

田村高廣さんと桂林にて

映画では、原作以上に「加害」に比重をかけていますから、日本兵の描き方などに少しばかりの違いが見えますが、それは原作のテーマを損なうものではありません。むしろ、加害者としての日本兵士の苦しみをリアルに写し出しています。

この映画が、日中合作という困難な条件のもとで完成したことに大きな意義があります。この映画を両国民の多くが観賞することによって、市民レベルでの日中友好の架け橋になることが期待出来るからです。『少年の目』がそうした営みの一端を担ってくれたことを嬉しく思っています。

筆者のプロフィール

1982年菅野小学校退職後執筆活動。

主な著書

『少年の目』（新日本出版）、『祖国への道』（牧書店）、『教師』（吉備・岡山文学賞）、『穂花』（新日本出版）、『どの子にも表現する力を』（民衆社）、『親と教師のための教育学』（青木書店）、『子どもと大人のいい関係』（草土文化）、その他。

大分にて

大分県企画文化部総合交通対策局
竹田浩三（山崎町庄能出身）

大分県庁に勤務して三年目になりました。

大分県とは何の縁もなく、小さい頃「滑って、転んで、大分県」というフレーズとともに九州の県名を覚えた記憶くらいのものでした。実は、大分の地もそれまで踏んだことはなく、高校一年の春休みに友人数人と九州旅行をした際にも日豊本線の一通過地点でしかありませんでした。

別府という温泉地の名前は知っていましたが、私の頭の中で大分県名とのリンクはありませんでしたし、若い女性を中心にポピュラーになっている由布院という名前すら知りませんでした。むしろ職業柄、知事の名前をよく耳にしていた程度でした。

このような私が、平成九年四月より、新米の交通担当の管理職として赴任することになったのですが、県庁マンとしてのスタートはのっけから誤算の連続でした。

四月二日、前日に知事から辞令をもらったばかりの私は、いよいよ始まった地方での新たな仕事に、まさに意気揚々としていました。午後になって、ある海上運送会社の社長さんがわざわざ県外から挨拶に来られました。新米管理職は、社長御自らが着任を祝って遠路はるばる足を運んでくれたものと思い込み、何と公務員思いの気質なのかと感激したのも束の間、来訪の主目的を告げられるや、自分の不幸を呪うことになりました。用件は、「数年にわたって頑張ってきたが、航路の維持が困難と判断」とのことだったのです。わずかな救いは、荷主に迷惑を掛けないためにも代わって運航してくれる会社を探すという一言でした。着任早々に厳しい洗礼と開き直りつつも、知事室に報告に行く際の足取りの重たかったことと言ったらありません。

冷静になって考えれば、バブルの行け行けの拡大路線と違って、景気の低迷による縮小路線に大きく潮流が傾いているわけで、致し方ないところなのですが、この後も新米管理職を「撤退の潮流」は襲います。

4月中旬には大分唯一の国際航空路線であるソウル線が運休になり、全日空の伊丹便が減便、日本航空が関空便から撤退と続きました。

このようなことが連続して起こってくると、いつしか私は自嘲の意味を込めて「交通デストロイヤー」と自称するようになってしまいました。

しかし、私の誤算は、仕事面だけではありませんでした。当時、官官接待等による食糧費や旅費の不適正支出が問題視され、大分県でもご多分に漏れず、平成六年度から八年度にかけての洗い出しを開始していました。着任してすぐ、その結果が公表されました。確か知事部局全体で三年間で四億円強だったと記憶しています。問題はその返還の仕方でした。不適正支出の返還の仕方は、個人を特定し返還を求めるやり方や、組織全体で背負い込みポストに応じて管理職が返還して行くやり方があるようですが、大分県の場合後者を選択しました。一見、理屈に合っているようで、実は私のように平成九年にいきなり管理職に採用された者は不適正支出に係わっていないにもかかわらず、返還の義務だけは負うことになるのです。返還はすぐさま開始され、給料から月々約一万円ずつ、これは二年以上経った今も返還し続けています。

謂れ無き債務を背負い込むことにより実質給料がダウンしてしまったという不幸は、家庭でも食卓の話題となりました。しかし、新米の管理職は自己主張することもできず、大勢に従うしか道はありませんでした。「まあ、東京に比べて物価も安いし、飲みに行く回数を減らせばええやんか」と宥め賺して、家庭争議に至らずに済ませるこ

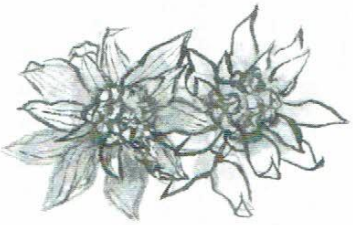
とができました。

その後も、決して問題が起きなかった訳ではありませんが、何とか無事に三年目の任務を続けているところです。

思えば、東京で引っ越し準備に追われていた頃、自治労大分支部から着任拒否の電報を受け取って「これでも行かなあかんの」と訴えていた女房殿は、今では、大分フリークと化しており、最近スポーツ新聞を賑わしたJ2「大分トリニータ」の試合の応援の際には得点の度に立ち上がって大声を発し、周りに融け込んでいました。

私の場合、なかなかその域に達することはできませんが、幼稚園から帰宅した長男が大分弁を話すのを耳にする度、大分の地に住んでいるんだなという実感が湧いてきます。

今後もまだまだ県庁マンとして奮闘を続けていくことになりますが、初心にかえって家族ともども頑張っていきたいと決意を新たにしております。いつかまた機会がありましたら、今度はその後の活躍振りに加え、大分の観光地情報、味情報などをご紹介したいと思います。それを待てない人は、どうぞ大分県庁三階にお越し下さい。北側の陽当たりの悪い部屋ゆえ、冬場はかなり冷え込みますが、温かいコーヒーなどを用意してお待ちしております。



筆者のプロフィール

昭和35年10月　山崎町で出生
昭和48年３月　山崎小学校卒業
昭和54年３月　淳心学院高等部卒業
昭和59年３月　東京大学経済学部卒業
昭和59年４月　運輸省入省

以後、外務省在インドネシア大使館勤務を経て平成９年４月より現職。

山崎茶華道協会創立三十周年を迎えて

山崎茶華道協会
金近小春

山崎茶華道協会も創立三十周年を迎えることが出来ました。それを記念しまして、平成十一年十一月十三日と十四日サンホールやまさきにおいて華道は七流派によります作品約八十点を、茶道は四流派で二席設けました。宍粟郡内はもとより遠くは姫路や竜野方面からもご来場いただき日本の伝統文化を紹介しました。華道は、小品花から大作まで各流派の特色を生かした作品が多くありました。

昭和四十四年一月に五十名位の会員をもって発足しましたが、現在は三百名近い会員となりました。若い人たちも増えております。

小畑欽之助会長より功労者十一名の方々に感謝状が贈られました。白谷山崎町長より野の花がこんなにもすばらしく又あたたかさを与えてくれるものかと感動しました。又いろいろな催しの中のすばらしい心を伝えて、さらなる文化の発展のためにつくしてほしいとお祝詞を頂きました。又会員の中の最高令者であります北川智恵先生からは、九十才になりましたが腰もまがらず目がねもかけず皆様に助けられて三十年、二十一世紀の幕あけを迎えることが出来るとお喜びで御座居ました。茶華道協会の一年間の行事としましては、さつき祭り協賛茶会、山野草の研究、中秋名月チャリティ観月茶会、秋のふれ合い文化祭華展と茶席をおこなっております流派は違いましてもお互い心のふれ合いを大切にし心豊かな町づくりや福祉に又文化の向上にお役にたてるよう努力を重ねております。

私は和室が大好きでございます。木の柱、畳、障子、襖等皆自然の中から選ばれたものから作られています。そのようなお座敷の中にひたる心地よさは畳ならでは味わえないと思います。簡単でシンプルの中にじっと座っておりますと昔の人々の考えにひたり日本伝統文化の重さを感ずることが出来ます。しぶい重さのあるものの良さを続けてゆける楽しさ又和菓子の似合うお部屋でお茶をいただき歓談の出来る雰囲気の心地良さは何ものにも変えがたくあたたかみがあるように思えます。足の痛い方又すわることの嫌いな方も椅子でくつろいでいただける立礼席になじんでいただき、若い人たちやご年配の方にも自然にお席に足を向けて下さるよう工夫を重ねてと願っております。

元禄繚乱の詩

山崎詩舞道連盟
小川　登

「やまさき文化」の昨年十八号に私は「頌浅野長矩侯」の漢詩を掲載させて頂きました。紙上で、長矩侯は芝居や講談で言うような、我が侭で短気、分別の無い殿様ではない。気力、胆力もあり、識徳共に備わった名君であると申し上げましたが、今回の元禄繚乱は、將に其の通り。山鹿素行の『中朝事実』の実践者として、内蔵助を叱り飛ばす程、見識のある主君として描かれています。一周忌の法要にも大石は詣っていないのですが、テレビでは大石が主宰して法要を営み「吾々だけでは様にならなかった。多くの領民の方々の御詣りがあったので、立派な法要になった」と述懐しています。領民からも慕われる藩主であった事が、窺い知れるものであります。

私は赤穂市から贈って頂いた『赤穂義人纂書』を引用して申し上げていますが、此の書は、盤城平の藩士で山鹿流の兵学者、鍋田晶山が嘉永年間、数十年の苦心を費やして輯録したものであります。当時は未だ幕府に遠慮して、誰一人出版を引き受ける書肆はいなかったのです。寫本が國会図書館にあったのを、明治四十三年に三百冊、限定出版されました。更に昭和五十年七月、日本シェル社より二〇〇〇部、限定出版された中の一冊であります。

更めて、秋の文化祭で発表した元禄繚乱の詩文を掲げさせて頂くと共に『義人纂書』の大石内蔵助以下の辞世を掲げさせて頂きます。内匠頭、内蔵助、夫々の人柄がよく表れています。

風さそふ　花よりも尚　我は又
　春の名残を　いかにとやせん　長矩

無念短刀（ムネンタンウ）託（クタク）信奉（シンポウ）遺臣志固（イシンココロザシカタク）怨府砕（エンプクダク）
四十七士人倫華（シジュウヒチシハ　ジンリンノハナ）三百星霜壮挙誇（サンビャクセイソウソウキョホコル）

小川　賀尉作

東へ下りて（大石内蔵助）
とふ人に　語る言葉の　なかりせば
　身は武蔵野の　露と答へん

泉岳寺にて
あら楽や　思は晴るる　身は捨つる
　うき世の月に　かかる雲なし　良雄

辞　世（吉田忠左ヱ門）
君がため　思ひぞ積る　白雲を
　散らすは今朝の　嶺の松風　兼亮

辞　世（小野寺十内）
まよはじな　子と共に行く　後の世は
　心のやみも　はる乃世の月　秀和

なき人の墓に詣で（十内の妻）
きのうまで　問へば答へし　言のはに
　聞くこそかはれ　松の下風　灰方氏

昭和会のこと

昭和会
庄　忠　正

私は平成八年七月、現役を引退し半世紀振りに故郷に帰って参りました。

その折、学友の猪尾幹生君からこれから山崎で生活するなら自分も会員である「昭和会」に入らないか、入る気持ちがあれば他の会員の皆様の承認を得る努力をするがと誘いがありました。頂いた昭和会の紹介文の要旨は次の様でした。

○設立　昭和三十一年四月　○メンバー、当初山崎在住の蛍雪の友、その後友が友を呼び現在に至る　○会の主旨、気軽な仲間の集いの中から時機に応じた課題を追求する。高邁な主義・主張は求めないし、又社会奉仕を主たる活動にするものでもない。尚具体的な活動は外部講師をお招きしての例会や旅行等との事でした。

私も山崎に知人が出来ればと云う思いがあり、又会の主旨も気に入りましたので入会をお願いした次第です。

平成九年一月に入会させて頂き、三年が過ぎました。この間、拝聴したスピーチは十八回、二回の健康例会、三回の一泊旅行、ソムリエにワインのたしなみ方を聞き乍らの会食や波賀フォレストステーションでの会食等、家族同伴の楽しい催し等に参加させて頂きました。

特に外部講師のスピーチはテーマが宗教から先端科学技術、県や町政の諸問題（含む警察、消防）外国紀行（インド、イラン等）社会、教育の諸問題や文明論まで多岐に及び、これがきっかけで色々な本を読む事もありました。又親しくして頂く方も出来、下手なゴルフをご一緒させて頂いたりもしています。このように、私にとって「昭和会」は、

○知的刺激を与えられる場
○地域の諸問題を考えさせられる場
○遊びの友を得られる場

であります。

平成十一年は次の方々にスピーチをして頂きました。紙面をお借りして厚く御礼申し上げます。

○県会議員、長田執先生「しそう森林王国について」○県立但馬技術大学校校長、三軒齋先生「技術屋の心眼」○山崎文学会、浅田耕三先生「反骨と不羈―二人の播州人―」○住友電気工業株式会社、播磨研究所所長、高田博史氏「放射光とその利用」○赤穂化成株式会社、取締役会長、石野通雄氏「塩雑感」○山崎町社会教育委員、河本雅視先生「教育を考える」

今後も会員の皆様と共に元気で時々は翁の知恵も発揮したいものです。

コーラスと共に

山崎町合唱連盟
小畑　芙美子

先日、古いアルバムを見ていますと私の高校時代、音楽部に入り、仲間と一緒に撮った写真を見つけました。下村記念館での定期演奏会の時、又夏休みに瑠璃寺で合宿した時の写真等、楽しかった私の青春です。

その後何年かの月日が流れ、友達に山崎町民合唱がある事を聞き高校時代の部活の経験もあったからでしょうか、すぐ入れて頂きました。

あれから二十年余りが過ぎ、今に至っています。町民合唱の歴史は古く、メンバーも新旧いろいろで八十才を過ぎてなお、若々しい頑張り屋で私達の尊敬する私の中学時代の先生横野婦美子さんから最近新しく入られた若い方まで年令差はさまざまで、今メンバーは二十名ほどです。指導の先生方に恵まれ、現在の指揮者は塚田美紀先生で学校で音楽の教師をされていましたが、退職され地域の音楽活動に力を注いでおられる実力ある先生です。又伴奏の長井美江先生も同様実力あるピアノの教師でいつも私達のコーラスを盛り上げて下さいます。ボランティアのようにお世話になっています。

毎年二、三回の合唱祭等に参加し、それに向けて週一回の練習に励んでいます。先生指導の発声練習に始まり、皆とハーモニーを一つにする様頑張っています。こうして長い間、コーラスと共に歩んできた月日を振り返りますのに何よりも心に残っているのは山崎文化会館が竣工した時、オーケストラを前にして、ベートゥベンの「第九」を歌ったあの感動は今も忘れられません。

藤井慧乗様ご夫婦のご努力により、又いろんな方のご縁、お世話によって、スウェーデン、ドイツ、オーストラリアを廻った歴史あるヨーロッパでのコーラス旅行、森と湖のスウェーデンではシンスカテェバリの町で三日間を過し、夏至祭に参加していろんな会場で日本の歌を歌いました。真夜中でも明るい白夜も体験しました。ドイツの有名なノイシュヴァンシュタイン城の中の「音楽の間」で特別に「箱根八里」を歌わせて頂いた事は忘れられません。又山崎町と姉妹都市のスクイム市を訪問して、小学校で可愛い子供達の前で歌ったり、丁度、灌漑用水祭りの一〇〇周年記念でそのパレードに参加して行進して街の人達との交流ができた事、又地域でのいろんな行事に参加した事等思い出は尽きません。

町民合唱に入り沢山の方々との出会いやお世話によりできたいろんな経験、仲間とのふれあいは私にとって大きな喜びです。今まで続けられた事に感謝し、これからも健康で心豊かに日々過せる様、思いを馳せるこの頃です。

勝負の心は花いちもんめ

山崎将棋同好会
杉元　正輝

将棋の起源（ルーツ）はインドに始まるといわれています。昔、インドに戦争好きの王様がいて、これを止めさせるために家来が考えついたのが、このゲームで、やがてシルクロードを西欧へ伝えられたのが「チェス」であり、アジア（東方）へ、ミャンマー（旧ビルマ）＝シットウイン、タイ＝マックルック、蒙古＝シャタル、中国＝シャンチ、韓国＝チャンギを経て日本に伝わってシンプル（単純）化したのが現在の将棋であります。

将棋は、近年「頭脳スポーツ」と呼ばれています。一般のスポーツとちがって大人、こども、男女差は前後の一手差以外は全く関係がなく対等に勝負ができるのが魅力であり、また一手ずつ交互に指すので、プロの内藤九段は「将棋は対話なり」の名言を吐いています。

将棋の勝負は「詰み」（玉を捕えて動けなくする）により投了します。その間はいくら勝勢であってもルール違反（二歩、打ち歩、行きどころのない駒）は即、負けになります。これが将棋のルールで明快かつ痛快なのです。

勝負というと、現代の日本では嫌う傾向にありますが、これはケンカではなく争点を競うことで思考力、心の鍛練を身につけることは重要なことです。

勝負は「三手の読み」と「一手の決断」から成ります。三手の読みとは、自分の手と相手の手を予測し、その上で次の一手を見つける作業であり、かつ「三つの選択」取る－かわす－手抜きのスイッチの切り替えの中から、一つの決断（次の一手）があります。

よく学び、よく遊べとは古来からよく言われますが、友だちと将棋をする楽しみと苦しみが人生そのものです。

現代人は心のストレスが充満していますが、このストレスの発散方法を各自が見つける知恵を身につけねばなりません。勝負とは、勝ってうれしい花いちもんめ負けてくやしい花いちもんめなのです。

今日このごろ

山崎美術協会
福岡久藏

三木市在住の小林欣子さんの個展が神戸でありました。神戸新聞の文芸欄に「風とか光とか、人の心のように、形は目に見えないが、絶え間なく変化し続けているものがある。小林氏の目は、それら見えないで変化し続けるものを追い求め、見据え、描こうとしている」とありました。

また、小林さんは「本当は風を描かずに風のことを描けたら…人形を描かずに、人形のことを描けたら…」「バラの花って、開くと人格が変わるから、私はつぼみの時か、そうでなければ枯れたバラしか描かない」とコメントされていました。

これらの話は分かり難いようですが、感じとしてはなんとなく分かるような気がします。

私など、見晴らしの良い高台に立った時とか、地平線まで見える平原に出会うと、気分が晴ればれとし心が広がる思いがします。そんな時、なんとか絵にならないかなと考えます。また、無邪気な子供の笑顔に出会うと、私も素直になり微笑み返ししながら、写真を撮りたくなったり、絵にしたくなったりします。その他、迫力のある大きな山や、大木に圧倒されたりすると「よーし、描いてやろう」と発奮したりもします。

このように、絵を描こうとする動機で考えると、情景から受けた驚きや感動が絵になったり、親しみや喜びも絵になるきっかけとなります。人によっては、怒りや悲しみを絵にすることもあります。つまり、目には見えない、その時々の心の移ろいを絵にしようとしているのだと私は思っています。

しかし、私たちには「絵」というものに、或る種の概念のようなものを身体につけて身動きできなくしているように思います。その事を端的に表している言葉に「私は下手だから絵は描かない」とか「これはうまいな。そっくりだな」というのがあります。「絵は対象物を正確に写しとること」と決めてしまっているのです。これでは少し寂しい気がします。

やはり、絵はその場、その時の情感を描くものと思っています。少しくらい形が歪んでいても、つじつまが合っていなくても、少々色トーンがおかしくても、大切なことは自分の思いや考えを表現することなのです。下手な絵の方が個性的なのではないかと思っている今日このごろです。

二人の母へありがとうの思いを込めて

新潮会 飛石晃男

小さい時の事をよく憶えていないのでわびしくさえ思うのですが、九才の時我が儘いっぱいに育ててくれた母は育ての母で、私を生んだ母は私が四才の時に亡くなっている事を知り、この母が居なかったら大きくなってないかも知れない。子供心にそう思い、この母を何よりも大切にしなければと思いつづけ、一昨年亡くなるまで母の言うことは絶対で、何でも聞くようにしておりましたから母にとって、とっても良い子だったようです。

母を大切に、の思いが強かったせいか人様にお話しする機会があれば決まって母の話しが口をついて出るのです。生んでくれた母の事は写真や姉から聞いて知っている位で、唯一の証しは、私の首根っこにいぼが10ケ程あるのですが、姉や母にも同じ場所にあったようです。姉は襟足の事でもあるので取ってしまったのですが、私は生みの親からの唯一の贈り物と思って大事にしており、孫達とお風呂に入るとそのいぼに興味を持ち、引っぱっておもちゃにするのですが、その度におじいちゃんを生んでくれたお母さんがこの首根っこに生きていると諭しております。

人に生まれたら働くのが当り前で、働く事を仕事にして参りました事の全てが二人の母によって形づくられ授かったものと思っております。そんな訳でお一人でも多くの方に母を知って頂くことが二人の母への恩返しであり、きっと喜んでいてくれると思っております。

生みの母は、父が農業に熱心だったので父を助け、野良仕事に精を出していたようで、私を背負って子守をしたという方が十六人もいらしたので、それだけ聞いてもよく働く人だったんだと思っております。それから内(うち)が波賀町の斉木という所でしたので千種から山越しの旅人には知らない人でも縁台に休ませ湯茶の接待をしたり、誰彼となくそこにあるものを差し上げたい人だったようです。

育ての母の父は、千種町で郵便角さんの愛称で村一番の働き者として村中の人から親しまれ、その娘でしたので、人は働くのが当り前の母だったのです。そんな訳で自分がじっとしてない位ですから、私がお店を手伝うようになってからは食事の時間ももどかしく、仕事仕事で追い廻されたものです。

そのようなことがあって二人の母から何よりも人を大切に思い、ありがとうの気持ちを添えて仕事を楽しみ、喜んで働く事等に計り知れない程大きなものをもらったと思っております。

囲碁は生涯の友

囲碁同好会
森本一二

昨秋、鹿沢の本多記念館で、旧学校職員恒例の囲碁大会がありました。

二〇名の参加がありましたので、五人ずつの四組に分けて総当りし、各組の勝者で優勝を決める仕組みです。

その準備をしていると、長老の某先生が見えました。しばらくぶりなので、「先生お元気そうで」と言うと、「いやいや、五十日余り入院し、弱りました」と腰を曲げ入って来られました。

先生は座っての対局は無理なので、椅子席を作り、専用の座にしました。

ところが碁の成績は上々で、組で勝上り、トーナメント戦でも一回戦を勝ち進み、遂に準優勝されました。

先生は、私より九才年上の八十五才、それに加えて、長い入院生活の後で、歩行も不自由な体で、この準優勝、まことに恐れ入りました。

一昨年の事です。叔母の初盆に詣りましたところ、八十四才の叔父が、「一局どうだ」と碁盤を指されるのです。この叔父さん、痴呆が進み、家を出ると帰り道が分からなくなるので、一人では外出禁止との事ゆえ、果して打てるのかと心配しながら対局しました。

ところがどうして、盤に向かうと、打つ石の道は、はっきりし、往年の棋力も闘志も変わりはないのです。

頭の中では碁の神経は別なのかと不思議に感じたものでした。

また、年に関係のない、大井万兵衛さんの話しは有名です。

昭和五十六年、大井五段、白寿の祝賀会が菊水旅館で持たれ、棋士の橋本国三郎・昌二先生の父子が見えました。

そこで橋本親先生の指導碁が打たれたのですが、九十九才の大井さんが大健闘で、ジ碁（勝負なし）になりました。「白寿にして尚一向に衰えない棋力」と一同を驚嘆せしめたものでした。

そしてまたそれが、碁の不思議であり有難い所であろう。

私も年が明けて喜寿になった。しかしこれらの方々に比べればまだ若い。

守拙会、老大の囲碁部に属しているが、囲碁同好会はじめ、各種の碁会にも努めて出場し、暇を作って喫茶太陽の碁席をのぞき、諸先輩のように囲碁を生涯の友として、長く付き合って行きたいと願うこの頃である。

童謡、唱歌

山崎児童合唱団
塚田美紀

「かごめ」「ずいずいずっころばし」を歌い、「雨がざあざあ降ってきて」と絵を書き、「おじょうさんお入り」と縄とびをしてきた子供の頃、これはなつかしい風景になってしまって、こんな「わらべ歌」さえ知らない子供たちが多い今日です。このわらべ歌は日本人の音楽の原点です。明治以降、新しい学制の導入で外国からもたくさんの歌が入ってきました。「蛍の光」「故郷の空」「アニーローリー」「庭の千草」などがそうで、すっかり私たちの心の中に入り日本の歌となっています。子供たちの歌は小学校で習う様になり、むずかしいものになりました。花鳥風月を語り教訓めいたものが多く、それも文語体ですから当時の子供たちには迷惑だったことでしょう。「夏は来ぬ」などがそうです。それでは子供たちが歌いにくいと生まれたのが「お正月」「はとぽっぽ」等で滝廉太郎らが子供の話しことばで、歌いやすいものを作ろうと取り組んだものです。その後、大正時代に入り童謡雑誌「赤い鳥」「金の星」からたくさんの名曲が生まれました。北原白秋、山田耕作、野口雨情、中山晋平らによって「かなりや」「まちぼうけ」「十五夜お月さん」「七つの子」「青い眼の人形」「赤い靴」など、その他にもたくさんの歌が世に出ました。それからはラジオ、テレビと世間の様子はかわり、子供たちは沢山の歌をすぐにきける様になりました。

文部省や偉い作家、作曲家の先生の運動を通してたくさんの歌が輸入され生まれました。それが今の私たちの心のふるさとです。そんな名曲を今、子供たちは歌い継いでいるだろうかということで疑問を持っています。私は児童合唱団の指導という、とても好都合な立場にいながら、多様化している音楽にどっぷりつかっている子供たちに、新しい感覚をもって昔の歌を〝古くさいイメージ〟ではなく大切にしていく、ということを教えるのはとてもむずかしいことです。でもこれらの歌を次の時代に渡していくことが私たち児童合唱団で出来たらいいなと思っております。どうかこの名曲が忘れられないように家でお歌い下さい。そして次の世代、また次の世代へと歌い継いでいって欲しいと思います。

春安　中寺の略歴

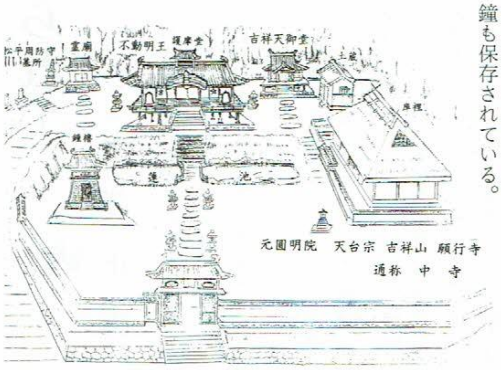
（天台宗成就院　吉祥山願行寺、通称　中寺）

山崎郷土芸能保存会　志水正信

中寺は、江戸時代山崎歴代藩主の祈祷寺であった。建立年代は不詳なるも、凡そ寛永時代と思われる。松平周防守、松平備後守時代は圓明院と称した。

本堂のご本尊は不動明王、脇に吉祥天、薬師如来等も祀られていたという。吉祥天は、毘沙門天の妃にして五穀豊穣の福徳富貴の女神として領地の豊穣を祈ったものである。また不動明王は、大日如来の化身にして背に火炎を負い、忿怒の相を持って一切の悪を降ろして、護摩を焚いて火焔を持って汚れを焼き浄め、衆生を守る祈りとした。

本多家では、成就院、吉祥山願行寺と称した。明治二年神仏分離令が発せられ、明治四年廃藩置県となり、時代は目まぐるしく変転して、藩主は東京に去る。明治五年廃仏毀釈の運動が起こり、明治七年城取壊し令と共に寺の建物まで壊すよう、神社庁より進言されたが、信者の一部がこれを守った。しかし壇徒無き故、寺の経営は困難となり、地元の一部信者のみにて僅かに支えられていた。明治中期頃、住持死亡後いったん無住となり、寺地は比叡山本山延暦寺の預かり地となり、本堂は荒廃し遂に倒壊す。ご本尊不動明王並びに経典大般若経等は信者の僅かの寄付により吉祥堂跡に持仏堂を設け保存し、山門・金剛力士像等は京都に持ち去られ以後行方知れず、本堂跡に家中の武家屋敷長屋門を移築して信者の一人が堂守をした。寺地は宍粟郡安積の天台宗普門寺が管理し兼帯となるも、その後幾多の変遷を経て当時の建物はすべて老朽崩壊し、僅かに護摩堂のみ横江敏夫氏のご尊父らの手により再建され、当時の鐘も保存されている。



山野草を追いかけて

植物同好会　増田珠代

早春のカタクリ、ザゼンソウに始まって、新緑の野山で森林浴を楽しみ、夏のシダ類、秋の紅葉ときのこ等々年八回の観察会が行われています。

観察会は指導者にもめぐまれ、熱心な会員の方々も多く、楽しい一日がすぎていきます。

道端の小さな花にもそれぞれ名前があり、由来を聞いたりと、一日に一ツの新しい事が覚えられたらと思っています。

私達の子供の頃にはどこにでも咲いていた草花も最近はとても数が少なくなっています。春のひな祭りの頃には、ミツバやセリを採りに行き、ワラビ、フキと山菜を採るのも生活の一部でした。その頃は根こそぎ採る様な事はなく、一部を又来年とれるようにと、残していたものでした。最近の山菜採りの人達のマナーの悪さは目に余るばかりのあつかましさです。根までごっそり引き抜いてほかしてあります。そればかりかこれは私の実家の出来事ですが山裾で人工栽培していたシイタケを全部とられた方がありました。山野草にしても同じです。持って帰ってもなかなか根づかないと思います。やはり古人の俳句にもある様に野におけレンゲ草が最も自然の姿だと思います。めずらしい花はそのままそっとながめるだけにしたいものと思います。

ガーデニングのブームです。園芸店に行けばステキな花が、簡単に手にはいりますし、季節をとわず一年中同じ花が咲いて長い間楽しめます。それはそれで良しとして、ほんの少しの間だけ花ひらいて、誰にも見られることのないまま実をつけ、散っていく山野草をたずね歩いて汗をかきお弁当を食べるのも又楽しいものです。皆様もぜひ一度参加してみて下さい。老若男女を問わず、いろいろの職業の方がおられます。話しを聞くだけでも勉強になります。私はこの会で、名前だけ知っていた春の七草、秋の七草の名前と姿が一致しました。毎回参加はむずかしいですが、あと子供の頃に夏に咲いていた別名アブラガヤだと思うのですが、カルカヤといっていた花に出合えたらうれしいと思っています。

竹の音色に魅せられて

バンブーファイブ　大部　正勝

「アワンナー」「そこの小節もう半音ほど上がらんかいなー」「上げとるつもりやけど…」「ここは、キッチリ二拍休んで」……これが我々バンブーファイブの練習会場での会話の全てです。

私たちがグループを結成して、もう五年も過ぎたでしょうか、音楽好きの仲間が集まって、現在八名。尺八には表に四個、裏に一個の計五個の穴が開いております。この五つの穴の塞ぎ方、開きかげんで、いろいろな音色と音階を作りますので、なかなか音が安定しません。ピアノやギターは、音階がキッチリと表現できますので音律に狂いはありません。

もともと、尺八は明暗流という寺院の音楽が全国に広がり、琴古流、上田流、都山流などと時代の流れの中で枝別れしながら、独奏あるいは琴や三弦などとの和楽器演奏とともに受け継がれ演奏されております。

私もかつては山崎町文化連盟の副会長を務められていた福山清一氏の上田流の門下生として、沢山の先輩達の指導を受けていたことがありましたが、あまり上達しませんでしたので一時中断しておりました。

ある時尾島忠義氏の紹介で山崎町に移り住んでこられた文化人、千田淳平氏と出会い、再び尺八を手にすることとなりました。

このときの出会いは、ピアノの演奏と尺八との共演という「和と洋の混成」で始まりました。

一つ一つの音階は音の連なりで横に流れてリズムをきざみ、和音は縦の方向に広がってメロディーを作り、この縦と横との広がりと重なりからハーモニイが生まれます。そうして美しいハーモニイはそれぞれの楽器の持つ音色の和から醸し出されて、初めて人の心の中に溶けこんでゆきます。

ベース、ギター、テナーサックス、パーカッションと仲間もどんどん増えてきました。老人ホームへの慰問演奏、観桜会、さつき祭り、ふじまつり、土曜夜店、芸能祭出演など年間の演奏会の回数も増えて参りました。これからもグループの和と輪を大事にしながら練習を重ね、町内の皆さんに愛され楽しんでいただける選曲と編曲で演奏会を続けていきたいと思っております。

踊りに出会えて

さつき民踊グループ　中野　みつゑ

人生五十年と言われた日本人の平均寿命も、欧米の長寿国に追いつけ、追い越せで今や、八十余年となり、私もかつての人生の終着駅の五十才過ぎに何か趣味をと思っていた頃「踊りにいかへん？」と声をかけてくれる友があり、縁あって「さつき民踊グループ」と出合いグループの定例練習日に参加させて頂くことになりました。

家族の理解、協力のもと、稽古にいたしましても寄る年波にはかてず、中々上手になれず悩む時もありましたが、先生、諸先輩の激励により、その時その時の課題を何とか覚え、各種発表会やボランティアに参加させて頂いています。

昨年、下の子が就職し、「自分の事は何とかするから仕事をやめて好きな事をしたら…」の一言で二十三年余りの仕事を退職し、今まで以上に練習に集中出来、敬老会やボランティア等で多くの方に練習の結果を見ていただき、おほめの言葉やアドバイスを頂きながら三年目を迎えることが出来ました。

今年からは仲間も一人増え、より一層稽古に励み皆様に見て頂けるよう頑張りたいと思いますので、今後共よろしくお願いいたします。

扇の裏表

邦楽邦舞研究会
坂東寿江予志

ある時、四方山話しの中で扇の話しになった事がある。おじぎの時の扇の置き方、取り方、開け方、たたみ方、持ち方などは基本であるが、面白いことに扇が笠になり、笛になり、風になり、波になり、又きせるにもなれば、銚子、盃にもなるという誠に便利な小道具でもある。が、それを知らずに手振りだけをまねると、知っている人から見ると、誠にお粗末で恥をかく事もある。踊りとは、ぬすんで、真似るものではあるが、勉強不足でぬすんで真似ては、身につくものではない……。

と、そんなとき、扇の裏表の話しになった。

「エッ！　裏表」

扇に裏表が有るのだろうか……？ひっくり返して見ても、たまたまその時の扇は、両面が同じ図柄であった。

エッ！　要の金具の打ち込みかな？それとも……、考えても考えてもいくら見ても全く解らない。その時さる方がこんな話をなさいました。

今は亡き人間国宝の坂東八重之助さんが、六代目菊五郎さんのお世話をなさっていた時、八重之助さんが、さっと菊五郎さんに扇を差し出されたら、パシッと扇で出された手をたたかれ、なぜかわからないまま次の日に同じ様に扇を出されると、すっと受け取られ、その次の日も同じ様に出されると又パシッとたたかれ、〝イテー〟と思いながらなぜだろう？扇をみながら考えに考え、ひっくり返し、ひっくり返し見てもわからず、とうとう一夜があけ、窓から差し込む朝日が扇にあたり、ハッと感づかれ、その日は心嬉しくさっと扇を差し出されると、すっと受け取られたので、八重之助さんは、

「今やっとわかりました。」とおっしゃると、菊五郎さんは、

「やっとわかったのか、馬鹿め。」とおっしゃったと。

知らない事は聞け…という言葉もありますが、聞いた事は忘れることの多いこの年、奥の深さを身でもって積み重ね、積み重ねて自分で結論をみ出される人間国宝の偉大な生きざまに、深く頭を下げ、この精神こそぬすんでいこうと、自分を見返っている今日である。

太鼓の魅力

播州山崎太鼓
松浦昌代

こんにちわ、播州山崎太鼓です。

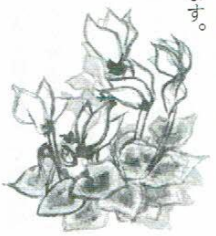
さつきマラソンやさつき祭りといった山崎町などのイベントに出演しているので、御存知の方もいらっしゃると思います。メンバーは、現在約二十名で、毎週火・木の二回練習に励んでいます。私達は今年で、結成六年目になります。最近では、オリジナルの創作曲をはじめ、新しいことにも取り組んでいます。

ところで、太鼓をしていると言うと、

「どうして太鼓？」と言われることがあります。太鼓との出逢いは人それぞれですが、私の場合、友人に誘われ播州山崎太鼓の練習を見学させてもらったことがきっかけでした。太鼓の音、リズムなど、全てが私にとってすごく衝撃的で、すぐに太鼓の虜になってしまいました。上手く叩けなくて悔しい思いをすることもありますが、太鼓をはじめてから二年たった今でも、はじめた頃のただ叩くだけで楽しいという気持ちに変わりありません。また楽しいことだけでなく、太鼓をはじめたことで自分自身が成長したようにも思います。というのは、普段あまり目立ったことがないので、始めはイベントに出演することが、恥ずかしかったり、怖かったりしていました。その反面、少しは目立ちたいという願望もありましたが…。でも最近では、機会があるなら、イベントに出演したいと思うようになりました。演奏が始まる前の緊張感や、演奏が終わった後の達成感（上手くいかなくて、落ち込むこともありますが）がたまらないと思えるようになりました。

技術的には、まだまだ未熟なのですが、演奏中も楽しむ余裕が少しだけ持てるようにもなりました。そして、この達成感を味わうためにはやはり日々練習しようと思い、頑張っています。でも何よりも、自分達が楽しんで演奏して、それを聞いて頂いた人達にも楽しんでもらえたらとても幸せです。ぜひ一度播州山崎太鼓を聞きに来て下さい。

最後になりましたが、只今メンバーを募集しています。太鼓に少しでも興味のある方、一度練習を見に来て下さい。お待ちしています。



地域振興の一つの考え

平成会　中村　勤

山崎町の振興計画では「人と自然と産業を誇るまち・山崎」の創造を基本理念として掲げ、五つの将来像を定めておりますが、地理的条件、人口の推移と年齢階層（少子化・高齢化）、労働の場、住民的思考、企業的思考等々を深く考えていくと、難しく行き詰まることばかりであって、いい方法が見出せません。

そこで、私なりに考えたことは、生産と購入・消費について町内生産消費方式がいいのではないかと考えます。すなわち、町内で生産・製造出来ているものは、町内で購入する。また、町内で必要なもので可能なものは町内で生産することです。（この方式での問題は、町内のみの消費に対しての生産活動では経営が出来ず、やはり町内外の取引きが当然でありますが。）

そうして産業会館的なものを建設し、町内で生産できる商品を一堂に集め、販売の拠点にする。また、会館で扱えないものに対しては、どの店で何を生産・販売できるかを紹介するコーナーを設ける等、徹底したPRが重要になります。

町内生産・消費方式の成功は、生産者と消費者が共に理解することがカギになりますが、町商工農林業の発展に少なからず寄与することは、絶対であると考えます。

最後になりましたが、今後とも平成会の活動にご理解・ご支援を賜りますようお願いいたします。

絹の道を訪ねて

播磨サツキ会　中井　てるお

このほどシルクロード天山のオアシス、ウルムチ、トルファン、敦煌、西安と旅をしました。悠久なる歴史を持っている中華民族の発祥の地の一つだそうである。

三千年の昔、周の時代最初の農業が黄河文明の始まりと聞かされた。漢の武帝が二千年前、中国から中央アジアに至るシルクロードを開通させた。酒泉から西へ広漠のゴビ地平線まで一直線で四百キロ、敦煌のオアシスが目に入った瞬間、ラクダで砂漠を旅した隊商の喜悦がよくわかった。

ウルムチ～トルファン間一五〇キロ高速道路、トルファン～敦煌間夜行列車で十三時間、この移動中偶然頭に浮んだのが、人間最後には三途の川を渡ってサイの川原を通って西国浄土とやらに行くのだと諭された話です。最初遠くの山は雪、平地は緑で畑作、そして山羊、羊等放牧。それも一時間も走らないうちに山はすべて岩山、そのふもとは瓦礫、そしてバラス状となり、川のほとりは柳と草が少しあり、次第に砂利を敷いた平地となる。これが見渡す限り地平線の彼方まで続く。方角によってはかすかに山も見える。川もいつか地下水となるらしい。この地方の川はすべてが海に流れていない。

仏教がインドから中国を経て日本に伝えられたと聞くが、三蔵法師がここを経てインドに渡り修業し、再びこの地を通って帰ったとの説明もあった。東西の交易、文化、使臣の交流の要衝となった地点が地上最悪の自然条件の所であったのだと思った。この様相を仏教を諭すのに引用されたのかなと理解した。

ウルムチでは、ウルクイ博物館で幼児から大人まで数知れぬミイラが展示され、中には寝たままの姿に見えるものもあった。

トルファンでは、お寺の跡があり、三蔵法師がインドで修業の行き帰り、ここに立ち寄ったと聞かされた。又ここは年間雨量十六ミリ蒸発量三千ミリとか。夏は四〇℃と高く、半地下生活である。水は地下水が豊富にあり、二千年も前から地下水道延三千キロ、二～三十米毎に一、五～二米の深さの穴があって利用されている。

敦煌は、シルクロードの要衝で、曽ては仏教、東西交易、文化使臣の往来などで賑わった町。莫高窟が有名で千仏洞とも呼ばれ二千年の歴史があり、四世紀から十四世紀にかけてここを通過する商隊が無事を祈って奉納したと伝えられる世界最大の画廊とまで言われている。

西安は、黄河の原点とも言われ、シルクロードの入口、気候も良好で農作物も豊富、昔は長安と呼ばれ漢の時代から西安となり、前後十二の王朝が千百年にわたり都とした。

いろんな文化財がある中、一九七四年に兵馬俑が発見され、一、二、三号と俑坑全体がドームでつつまれている。一号俑坑は幅六三米、長さ二一〇米、深さ平均五米、その中に等身大の兵俑一体一体が顔形、服装、持物がそれぞれ異なった作りで馬俑もしかり、推測で全部発掘されると八千体以上の兵馬となるといわれている。

この発見で全世界は秦帝国の力を改めて認識した。

今回の中国旅行は、完全な観光ツアーで、いろいろと見聞しましたが、その十分の一も話せません。ここ数年、年一回乃至二回、中国の殆んどの処で緑の植樹作業が行われています。中国には子供の頃の生活の想い出が一杯残っている。シルクロードの旅では、中国の偉大な歴史と画面では少し見ていたが、この目で見て底知れぬ国と感じ、まだまだ行きたい国です。

浄瑠璃寺の風景

山崎郷土研究会
久保寅夫

今秋の研修旅行先は浄瑠璃寺との案内状が来ました。若い頃『浄瑠璃寺の春』という紀行文を読んだ。白い馬酔木が印象的で、是非訪れたいと思いつつ戦争が激しくなり、何時しか忘れていた。案内状を見てから急に『浄瑠璃寺の春』を読みたくて、書架の中から大和古寺、大和古寺風物詩、『古寺巡礼』など手にとってみたが見当たらず、二、三日して堀辰雄さんの著で旺文社の文庫本の中に見つけた。

旅行の当日は年甲斐もなく胸が躍った。曇天ではあったがまずまずの天気、二台のバスは途中の渋滞もなく予定通り目的地に着いた。

余り広くない駐車場は静かで、二三軒の土産物屋は落ち着いて飾り気がない。焼き物が所せましと並べてある。店の前から狭い参道、右側には馬酔木の古木が古びた低い門近くまで続いている。花の頃であればどれ程美しいことかと思いつつ歩いた。小さい門の傍にある堀さんの馬酔木は見つけることが出来なかった。

一宇のお堂が阿弥陀堂で肩の張ってないのが、緊張感を和らげ親しみを感じさせる。太陽の沈む西方浄土へ迎えてくれる阿弥陀仏を、西に向って拝めるように東向きにし、前に浄土の池をおき、対岸から文字通り彼岸に来迎仏を拝ませる形にしてある。お堂の中はうす暗く、一体一体の如来が堂前に板扉を持って九体安置されている。和尚が跪座して佛を拝んで下さいといわれた。佛の半眼と私の目線が合うと、目線の合った瞬間私の背筋を冷たいものが走ったように感じた。秘佛吉祥天女像が開扉されていたのは幸運でした。豊かな白いほほ、赤い唇、左手に載せられた玉、手のひらをみせた右手、極彩色に彩られた豊満な姿態、一瞬古く淡い思い出が横切った。

青く濁った池に泳ぐ鯉と亀、萩の花は既に散って半ば黄ばんだ葉を残している。松林の中いかにもさわやかに建っている三重の塔は、威圧感がなく親しみが感じられる。石段をあがり三重の塔にたどりついて、そこから蓮池をへだてて、さっきの阿弥陀堂を見かえした。

晩秋の小雨降る中のお堂は静かで、何時までもこのまま、世間すべてのものを忘れ去っていたかった。いかにも平和で、いかにも山間の晩秋らしい浄瑠璃寺の旅であった。

鯉はねて　一入静か　はぎの風
みだのほほ　法燈ゆれる　はぎの風

薪（たきぎ）能

謡曲同好会
葭谷　暁

山崎八幡神社奉納薪能も十一回目を終了させて頂くことができました。二回目までは毎年実施、三回目以降は隔年に実施されて二十年の歳月を継続させて頂けた事は薪能実行に深いご理解とご奉賛下さった多くの皆さん方の温かいお気持の賜物と、宍粟郡謡曲同好会の皆さんの能楽に対する熱意の賜物と思っております。因みに今日の薪能ブームの凄まじさは能楽関係者も一様の驚きの事とか、全国一〇〇ケ所以上の土地で薪能が催され、いずれの会場も観衆であふれ、能は薪能で大衆のものになったと書籍に書かれておりました。その一部を薪能について抜粋しますと、江戸時代の薪能は奈良の地において御神事として興福寺と春日神社で行われていた由。夜に入り薪を焚いたので薪能と呼ばれ、薪は御神火でもあったが照明のためでもあった。徳川幕府は能を式楽に指定し、奈良の薪能に毎年莫大な費用を支給したようです。当時の薪能は拝観するものであって鑑賞するものではなくその見識の高さにおいては想像をはるかに超えるものがあったようです。

しかし徳川幕府が倒れ新政府が樹立された時、能を式楽として保護することはなかったようで能楽師は路頭に迷い能の苦難時代が始まり、奈良の薪能も中止されたまま復興のきざしもなく、明治二十年前後に三回、大正年間は皆無、昭和に入っても数回行われているだけであったとか、奈良の薪能が古儀にのっとり毎年興福寺と春日神社で行われるようになったのは、昭和二十七年以降のことで、これは奈良薪能保存会のもとに現在も継続され大変人気を集めています。戦前は能は一般大衆の見るべきものではないという潜在意識のもと、諸芸能の上に君臨してきた能は、一般大衆が見ても解らないという気持ちが先立ち、封建制度の名残りが尾を曳いていたようで、戦前の一般大衆は能については食わずぎらいであったといえるでしょう。戦後何でも見てやろう、知ってやろうという自我に目覚めた大衆にとって、能との接触を無意識のうちに求めていたような状態で、そんな時に薪能が催され大衆がそのとりこになった、薪能と大衆との出合いには何か必然的な運命というものを感ぜずにはいられない。云々

若い人の遊びも時代を経て変わってきましたが、古くから継承された古典芸能を絶やす事なく、多くの方にこの道に参加して頂きたいと願う一人です。

事務局便り

☆「文化のこみち」づくり

山崎町文化協会は同町中心部の脊山、最上山ふれあいの森公園を、より一層、町の人たちに親しんでもらえる公園にしたいと、平成八年十一月、町当局と話し合い「文化のこみち創造推進委員会」を結成。それ以来、同委員会が中心になり、各地の歌碑や句碑の建立地を視察するなど「文化のこみち」づくりの具体的な計画を練った。

平成十年春、第一期工事に着手。同公園内の〝千畳敷広場〟と、その付近の遊歩道の側辺に歌碑と句碑十六基を建立「文化のこみち」の標碑も設けて同年秋、完成式をあげた。

第二期工事は平成十一年夏から準備をすすめ、同年秋、同公園内の東南に当たる展望台から〝百畳敷広場〟にかけての建立予定地にクイ打ちをした。平成十二年春から本格的な工事にかかり、新しく二十基を目標に歌碑と句碑づくりをする計画。

☆山崎茶華道協会三十周年記念

山崎茶華道協会創立三十周年記念茶華道展が平成十一年十一月十三、四両日、山崎文化会館で開かれた。会場には華道作品を、ずらりと展示。茶席も設けられ、訪れた人たちは日本伝統文化とのふれあいを楽しんだ。

同協会は昭和四十四年創立。当初会員は百二十名だったが、現在は華道七流派、茶道四流派。会員は四百二十五名に増えている。

編集後記

編集長　荒木俊介

予てより機関誌「やまさき文化」の活字がもう少し大きくならないかという読者の方々の要望を聞いていましたが、次年度は、二十号という周年号にもなりますので、何とか実現させたいと委員一同夢をふくらませております。経済不況の折柄、予算の問題もありますが、精一杯努力してみたいと考えておりますので、よろしくご協力の程お願い申し上げます。

さて、今年度の十九号にも各団体より、その活動状況や随想など素晴らしい内容のある原稿をお寄せ頂き委員一同心より厚く御礼申し上げます。

特別寄稿には黒薮次男氏と竹田浩三氏の二人にお願いしました。共に興味ある内容ですのでご熟読下さい。

終わりになりましたが、十八・十九両号の表紙並びに挿絵のお世話になった神名彰子氏には誌上をかりて厚く御礼申し上げます。

ＯＡ機器・事務用品・スチール家具
学校設備品・理化学機器・楽器
office service ITO イトーオフィスサービス株式会社
代表取締役　伊藤和久
山崎町中広瀬117−12　ＴＥＬ(0790) 62−0126

創業明治28年・さつき本舗
四季の菓子
御進物・おみやげ・お茶うけに、四季折々の
真心こめた手づくりの御菓子を
御菓子司あらき
本　店：播州山崎町さつき通り　(電)62−0170
山田店：播州山崎町山田　(電)62−0160

飛石機械産業からのお願い

人が人として幸せになれる処方箋は何なのか、そのようなことを考え「幸福の泉」を生活信条に、自作自演で30数年を歩いて参りました。昭和46年、会社発足時に経営理念と改め、お客様のご信頼にお答えする為に、人としての使命感に燃え、それを無限のエネルギーとして全社揚げて取組んでおります。

当社では、企業は社会の公器でなければと申し上げており、流通の世界の中で生活文化の向上を願い、多目的に活躍しておりますので、尚一層のご支援をお願い申し上げます。

TOBIISHI

飛石機械産業株式会社
TOBIISHI KIKAI SANGYO CO.,LTD.
for happy day happy life

飛石建機 dept.
トビイシ住設 dept.
CREATIVE dept.
飛石レンタリース山崎
飛石レンタリース姫路
飛石レンタリース赤穂

✦最新型カラー現像機導入✦
カラープリント・スピード仕上げ
良い品を・安く・安心して買える店

Specialty Camera Shop
コーエーカメラ

宍粟郡山崎町東鹿沢26-3
本　店 TEL(0790)62-2089
咲ランド店 TEL(0790)63-0533

料理旅館・割烹

創業
文久元年
菊水

兵庫県宍粟郡山崎町山崎２８７
TEL（０７９０）６２－１１１９(代)

幸せへの旅立ちに――。

ふじむら貸衣裳

宍粟郡山崎町山崎181　TEL(0790) 62-0052

くらしのメッセージいろいろ……
●大切な年金、給与振込はにししんの自動受取であんしん
●素敵な暮らしのお手伝いにししん個人ローンでお気軽にどうぞ

豊かな街づくりをお手伝いする
西兵庫信用金庫
TEL 0790-62-2020(代)

清酒 山陽盃
ふるさとのお酒
確かな品質
サンヨウハイ
本醸造 しぼりたて 龍神
純米酒 きつき 一献

山陽盃酒造(株) TEL(0790)62-1010(代)

MIKIMOKU
株式会社ミキモク
兵庫県宍粟郡山崎町庄能120
TEL (0790) 62-1238(代)
FAX (0790) 62-5180
(株)ミキモク販売
(株)マンクス
(株)ミキモク東京営業所
埼玉県草加市氷川1234
TEL 0489-22-5656
FAX 0489-28-5450
株式会社九州ミキモク 福岡県大川市向島字中開118 TEL (09448) 6-3418(代) FAX (09448) 6-3419
株式会社タイミキモク (本社)タイ国バンコック市ニューロード1173-4 TEL (02)236-4694 FAX (02)236-7198
合作工場 華豊美樹木 中国遼寧省荘河市延安路2段125号 TEL 0411-8612720 FAX 0411-8613307

＊安全で快適な生活をお届けする＊
JOMO 株式会社ジャパンエナジー 特約店
ホンジョウ
本社 兵庫県宍粟郡山崎町中井96 TEL (0790)63-1234(代) (0790)62-4321(代)